

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第280集

茨木市

総持寺遺跡 4

摂津富田・茨木間新駅設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

公益財団法人 大阪府文化財センター



1. 4土器溜まり出土遺物 (上)
2. 第5層出土ミニチュア土器 (右)

序 文

本書にて報告をおこなう総持寺遺跡は、大阪府茨木市の東部に位置する弥生時代から中世の複合遺跡として知られており、これまでに大阪府教育庁や茨木市教育委員会、当センターによって、およそ43,000㎡以上の面積の調査が実施されてきました。とりわけ初期群集墳とも呼ばれるような古墳時代中期の小規模墳からなる古墳群や、100棟以上もの古代の掘立柱建物などが話題を集めており、当地域における歴史の復元に大きな寄与をしてきました。さらに最近の調査では、古墳群と同時期の集落跡が確認され、今回の調査でも竪穴建物跡がみつかつており、遺跡の全体像が判明しつつあります。

総持寺遺跡が位置する摂津・三島とよばれる淀川北岸のこの地域は、旧石器時代以来長い歴史の積み重なりがあり、古墳時代に入ると太田茶白山古墳や今城塚古墳などの巨大な前方後円墳が築造されるなど、畿内でも重要な一角を占める地域として頭角を現すようになります。古代には山陽道が当地域を横断し、それを引き継いだ西国街道は西日本各地と京を結ぶ重要な交通路として機能しており、この役割は現代においても東海道本線や東海道新幹線、名神高速道路などの大動脈に受け継がれ、地域の発展を支えてきました。

この度の発掘調査は、JR東海道本線の摂津富田・茨木駅間に設置する新駅の建設に先立って実施したものであり、この地域の新たな賑わいの創出に大きな期待が寄せられているところです。これに加えて遺跡の発掘調査によって得られた知見が、地域の歴史像の構築にも寄与できれば、望外の喜びとするところです。

最後になりましたが、発掘調査を円滑に進めるにあたって、事業主である西日本旅客鉄道株式会社をはじめとし、大阪府教育庁、茨木市教育委員会との関係各位には多大なご指導・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。今後とも当センターの実施する事業へのご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成29年6月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府茨木市庄一丁目・西河原一丁目で実施した総持寺遺跡（調査名 16-1）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、摂津富田・茨木間新駅設置工事に伴い西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと実施した。
3. 発掘調査および整理作業に関する期間および体制は以下の通りである。
[受託事業名称]：摂津富田・茨木間新駅設置工事に伴う総持寺遺跡（2期）の埋蔵文化財発掘調査
現地調査 平成 28 年 11 月 1 日 ～ 平成 29 年 1 月 17 日
整理作業 平成 29 年 1 月 18 日 ～ 平成 29 年 3 月 31 日
[平成 28 年度]
事務局次長 江浦洋、調整課長 岡本茂史
調査課長補佐 三好孝一、同課技師 笹栗拓（調査・整理担当）
4. 本書の執筆および編集は笹栗がおこなった。
5. 本書に掲載した写真のうち遺構は笹栗が、遺物は当センター写真室が撮影した。
6. 第 4 章に掲載する軟 X 線写真撮影による土壌構造分析は、バリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した結果を報告するものである。
7. 発掘調査ならびに報告書作成の過程においては、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して感謝致します（順不同、敬称略、所属は当時のもの）。
岡本敏行・小浜成・原田昌浩・藤田道子・藤永正明・三好玄（大阪府教育庁文化財保護課）、黒須靖之・清水邦彦・中東正之（茨木市教育委員会）、諫早直人（独立行政法人奈良文化財研究所）、内田真雄・森田克行（高槻市立今城塚古代歴史館）、絹島歩（奈良県立橿原考古学研究所）、辻康男（バリノ・サーヴェイ株式会社）、中久保辰夫（大阪大学）、菱田哲郎（京都府立大学）
8. 本書に関わる出土遺物および、写真・図面等の記録類については、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望む。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。図中の標高は全て（T.P.）からのプラス値であり、図中のT.P.＋については省略した。単位は全てmである。
2. 発掘調査では世界測地系（測地成果2000）の平面直角座標系第VI系に基づき表示した。遺構図に記載した座標値の単位は全てmで、用いた方位はいずれも平面直角座標系第VI系の座標北を示す。
3. 現地調査および整理作業は、公益財団法人大阪府文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠しておこなった。
4. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
5. 各遺構の記載については、調査区・遺構面に関わらず全て通しの遺構番号を付し、遺構番号→遺構種類順で遺構名を記載している。建物跡などの複数遺構の集合体によるものについては、遺構種類→遺構番号の別に番号を付した。（例：「1土坑」、「19溝」、「竪穴建物7」など）
6. 遺構図における断面位置は、図面上に「—」形によってその位置を示した。個別遺構の縮尺は40分の1または60分の1を基本とするが、遺構の規模に応じて縮尺率を変更しているものもある。
7. 遺物の縮尺は土器を4分の1で図示し、大型品の一部は6分の1で図示した。このほかでは金属器を2分の1、石製玉類を等倍で図示している。詳細は各図のスケールを参照されたい。土器類の挿図は須恵器の断面を黒塗りに、施釉陶器をアミフセで表現し、その他は白抜きとした。
8. 掲載遺物は通し番号を付した。本文・図版・一覧表・写真図版の番号は全て一致する。
9. 本書で参照した文献は各章の末尾にそれぞれ註で示した。また、本事業に伴う（1期）の調査成果については既に下記の報告書が刊行されている。本書で報告する調査区と隣接する調査区の成果であり、随時その成果に触れるため、併せて参照されたい。

奥村茂輝 2014『総持寺遺跡3』（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第250集

10. 出土土器の年代観や器種分類については、特に断りのない限り下記文献を参考とした。

〔弥生土器〕 森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

〔古墳土器器〕 寺沢薫 1986『畿内古式土器器の編年の二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第49冊 奈良県立橿原考古学研究所
辻美紀 1999『古墳時代中・後期の土器器に関する一考察』『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室

〔古墳須恵器〕 田辺昭三 1983『須恵器大成』角川書店

〔古 代〕 西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真岡社

小田裕樹 2016『飛鳥・奈良時代における都城土器編年の現状』『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』考古学研究会関西例会 200回記念シンポジウム発表要旨集

〔平安・中世〕 橋本久和 1991『大坂北部の古代後期・中世土器の様相』『高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度』高槻市教育委員会

中世土器研究会編 1995『概観中世の土器・陶磁器』真岡社

目 次

巻頭写真	
序文	
例言	
凡例	
第1章. 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章. 位置と環境	
第1節 地理的・歴史的環境	6
第2節 既往の調査成果	10
第3章. 発掘調査の成果	
第1節 基本層序	11
第2節 第1層～第3層関連の遺構と遺物	[中世～古墳時代後期] 13
第3節 第4層関連の遺構と遺物	[古墳時代中期～前期後半] 20
第4節 第5層関連の遺構と遺物	[古墳時代前期] 47
第5節 第6層以下の所見と遺物	[古墳時代初頭～弥生時代後期] 52
第4章. 軟X線写真撮影による土壌構造分析	
	(バリノサーヴェイ株式会社) 54
第5章. 総括	61
附表 出土遺物(土器類)一覧表	65
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

図1. 調査地の位置と周辺の遺跡	1	図22. 6溝、29溝 遺物出土状況	34
図2. 今回の調査地点と既往の調査地点	2	図23. 6溝、29溝 出土遺物	35
図3. 地区別と調査区配置図	4	図24. 第4-2層除去面 竪穴建物群 平面・断面	36
図4. 総持寺遺跡の位置と周辺地形・遺跡分布	7	図25. 竪穴建物10・8、18土坑 平面・断面・出土遺物	37
図5. 総持寺遺跡における既往の調査地点	9	図26. 竪穴建物7 平面・断面・検出状況・出土遺物	39
図6. 基本順序（北壁断面）	12	図27. 13土坑、14・16溝 平面・断面・出土遺物	41
図7. 第1層・第2-1層除去面 全体平面図・出土遺物	14	図28. 第4-3層除去面 全体平面図・出土遺物	42
図8. 第2-2層除去面 全体平面図・出土遺物	16	図29. 20土坑 平面・断面・出土遺物	43
図9. 第3-2層除去面 全体平面図・出土遺物・ 2土坑断面	17	図30. 19溝 平面・断面	44
図10. 1土坑 平面・断面	18	図31. 19溝 遺物出土位置・出土遺物	45
図11. 1土坑 出土遺物	19	図32. 第5-1層・第5-2層除去面 全体平面図・遺物出土状況	48
図12. 第4-1層除去面 全体平面図・遺物出土位置	21	図33. 第5層 出土遺物	49
図13. 第4-1層 出土遺物（1）	22	図34. 33・34溝 平面・断面・出土遺物	50
図14. 第4-1層 出土遺物（2）	23	図35. 第6層以下 全体平面図	52
図15. 4土器溜まり 平面・遺物出土状況・出土遺物（1）	26	図36. 第6層（自然壕路）出土遺物	53
図16. 4土器溜まり 出土遺物（2）	27	図37. 試料採取地点（北壁断面）	54
図17. 5土坑 平面・断面・出土遺物	28	図38. 1地点（サンプル1・2・3）の試料 （左：発光写真・右：X線写真）	56
図18. 3流路 平面・断面・遺物出土位置	30	図39. 2地点（サンプル4・5）の試料 （左：発光写真・右：X線写真）	57
図19. 3流路 出土遺物	31	図40. 調査区における土地利用の変遷	61
図20. 第4-2層除去面 全体平面図・出土遺物	32	図41. 古墳時代中期における総持寺遺跡の集落構造	63
図21. 6溝、29溝 平面・断面	33		

表 目 次

表1. 総持寺遺跡発掘調査履歴一覧	8	表3. 第4-2層除去面 竪穴建物周辺遺構変遷表	36
表2. 4土器溜まりほか玉類一覧	27		

本文挿入写真

写真1. 第2-2層除去面 噴砂（東側）検出状況	15	写真5. 29溝 遺物出土状況	34
写真2. 第4-1層 遺物出土状況	23	写真6. 19溝 遺物出土状況	46
写真3. 4土器溜まり 遺物出土状況	26	写真7. 第5-1層 小型器台（277）出土状況	48
写真4. 3流路 遺物出土状況	29		

写真図版目次

巻頭図版1. 1. 4土器溜まり出土遺物 ／2. 第5層出土ミニチュア土器	写真図版5. 第4-2層除去面
巻頭図版2. 1. 竪穴建物7／2. 29溝高杯出土状況	写真図版6. 第4-3層・第5-1層・第5-2層除去面 出土遺物1 1土坑／第4-1層
写真図版（扉）ミニチュア土器出土状況（287～290）	写真図版7. 出土遺物2 4土器溜まり／第4-1層
写真図版1. 調査地遠景／基本順序・断面1	写真図版8. 出土遺物3 3流路／第4-1層
写真図版2. 基本順序・断面2／第4-1層除去面	写真図版9. 出土遺物4 29溝／20土坑
写真図版3. 第1層・第2層・第3層除去面	写真図版10. 出土遺物5 19溝／観注間遺物ほか
写真図版4. 第3-2層・第4-1層・第4-2層除去面	写真図版11. 出土遺物6 第5層・第6層

第1章. 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

総持寺遺跡は茨木市の南東寄りに位置する縄文時代～中世にまたがる複合遺跡で、本書は茨木市庄一丁目・西河原一丁目地内で実施した「摂津富田・茨木間新駅設置に伴う総持寺遺跡（2期）の埋蔵文化財発掘調査」の成果をまとめた発掘調査報告書である（図1）。

茨木市と西日本旅客鉄道株式会社が計画するJR京都線（東海道線）摂津富田～茨木間新駅設置に伴う事業は、平成23（2011）年7月に基本協定が締結され、平成24（2012）年11月より工事が着工されている。新駅施設部分は総持寺遺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲に位置するため、当事業に関する埋蔵文化財調査については平成24（2012）年7月に茨木市教育委員会が確認調査を実施した結果、遺構・遺物が確認されたことから発掘調査をおこなう必要性が生じた。それを受けて事業者である西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所は、大阪府教育委員会（当時、現大阪府教育庁）と協議をおこない、公益財団法人大阪府文化財センター（以下当センター）も含めた3者間で平成25（2013）年1月11日に埋蔵文化財発掘調査の実施委託に関わる覚書を締結し、当センターが事業者の委託を受けて埋蔵文化財調査を実施する運びとなった。

このうちまず平成25（2013）年8月～平成26（2014）年4月には、線路の拡幅工事と府道総持寺停車場線五反田橋梁部分の改良に伴って1期調査を当センターが実施し、古墳時代中期の集落跡や河道、

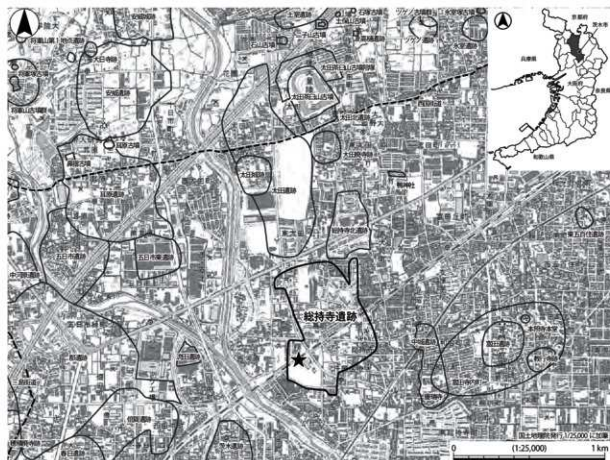


図1. 調査地の位置と周辺の遺跡

第1章 調査の経緯と経過

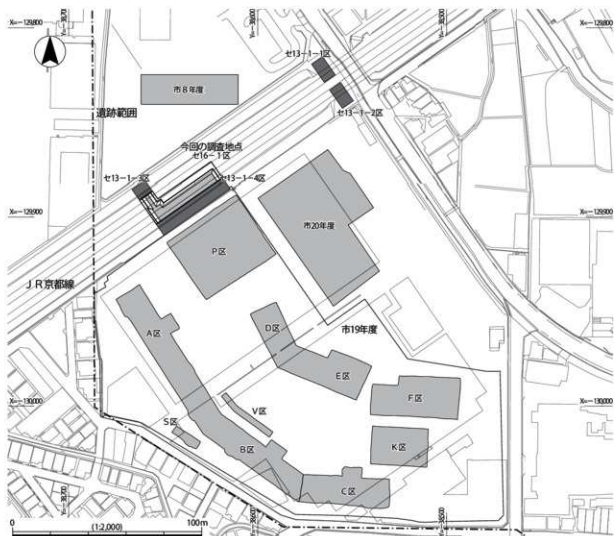


図2. 今回の調査地点と既往の調査地点

古墳時代後期～中世にかけての耕作層を確認した。

これに続く今回の2期調査は、西日本旅客鉄道株式会社と当センターが平成28(2016)年10月11日付で締結した「摂津富田・茨木間新駅設置工事に伴う総持寺遺跡(2期)の埋蔵文化財発掘調査」の委託契約に基づいて、新駅の施設と自由通路の建設に先立って実施するものであり、大阪府教育庁文化財保護課(以下府教育庁)の指導のもと平成28年11月1日から平成29年1月17日の期間で実施した。1期調査の3区・4区の中間隣接地にあたる鳥式ホームと下り内線の直下部分が今回の調査対象で、4区の北側に隣接する南側の幅5m・216㎡の範囲で発掘調査を実施した(図2)。また調査地点ではJR京都市線の軌道敷面が現地面から高さ約4mの盛土上にあり、この盛土の切土補強土壁の受働側の工事・調査の安全を確保する必要があったため、下面幅で北側5mの範囲を補強土として残したことから、この範囲については当センター監督員が工事掘削の際に立会して遺物の収集と遺構の把握につとめることになった。1期調査で確認された古墳時代中期の竪穴建物跡の拡がりか推測されるとともに、下層のトレンチ調査によって先行する時期の遺構・遺物の存在も確認されたことから、発掘調査と立会はこの遺構・遺物の記録保存をはかることを目的に実施した。

第2節 調査の方法と経過

調査の方法と経過 JR京都線の軌道敷面から1期の調査成果から判明している旧耕作土の上面付近T.P.+11.2mの高さまでを事前に掘削し、そこから遺構・遺物の存在が推測されるT.P.+9.85mの高さまでを発掘調査の対象とした。11月1日より掘削を開始し、当初の計画の通り盛土と近世以降とみられる耕作土までの深さおよそ0.4mをバックホウで機械掘削した。その後、第1層以下を人力掘削の対象とし、各層の除去面でも構検出をした上で図面作成や写真撮影をおこない、記録保存をはかっている。11月末には今回の調査で主要な遺構面となる古墳時代中期の遺構面に到達し、12月9日と12月21日の両日には竪穴建物などの遺構がまとめて検出された第4-2層除去面（古墳時代中期）と最終調査面である第5-2層除去面（古墳時代前期）でそれぞれ府教育庁の立会を受け、発掘調査の現地確認と指示を受けた。また両立会の前後には茨木市教育委員会や関係各位の来訪を受け、周辺の調査成果や検出された遺構・遺物に関する所見などについて、さまざまな助言やご教示を頂くことができた。

なお、当初計画した調査終了面の高さであるT.P.+9.85mは、西側が第5-1層中に、東側が第5-3層除去面に概ね相当しており、これより下位では西側に古墳時代前期の流路が、東側に弥生時代後期～古墳時代初頭頃の流路がそれぞれ存在することが判明している。ただし、当初計画の調査終了面までが工法上の掘削限界でもあったことからこの高さで調査を終了し、下層については層序の関係を把握するためのトレンチを部分的に設けて層序等の確認をおこなっている。こうした一連の発掘調査は12月27日にすべて完了し、調査終了後に事業者へ引き渡した。

平成29年1月6日からは切土補強土壁の受働側補強土として残した北側部分の工事掘削が開始され、1月9日にかけて立会をおこない、この範囲の遺物の収集と遺構の把握につとめた。特に工事範囲の東端側では、発掘調査を実施した南側で竪穴建物が出検されて一部が北側に扯がることが事前に判明していたことから、主要な遺構の扯がりが予想される東端から約5mの範囲については、施工業者の協力によって慎重な掘削をおこなうことができた。これによって確認できた遺構や遺物については可能な範囲で写真を撮影し、位置関係等の記録を補足している。さらに、まとまった量の遺物の出土が見込まれる範囲を指定して掘削土を選別し、この中から遺物の収集をおこなっている。こうした一連の作業は1月17日までにすべて完了し、調査を終了した。

現地調査で出土した遺物については、大半は調査期間中に現場詰所で洗浄をおこない、注記をした。また、微細な遺物や植物遺体の出土が予想される遺構の埋土については水洗選別して、滑石製白玉や製塩土器などを回収している。

記録 発掘調査は当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠して実施した。当センターでは世界測地系の国土座標（第VI座標系）に基づいた大阪府下全域をカバーする統一的な地区割りを設定しており、遺物の取り上げや写真撮影などの記録作業はすべてこれに則っておこなっている（図3）。全体平面図や個別遺構の作成には前回調査時の既設の基準点から調査区内外に単点を移設し、これらの単点から平板測量や手測りで平面図を作成し、併せて土層断面図も作成している。

このほかに竪穴建物群が検出された4-2層除去面（古墳時代中期）では、当センターが所有するFARO社製のレーザースキャナ FOCUS 3Dを活用して、遺構面の3次元的な記録作成をおこなっている。本書で掲載した挿図についてはすべて世界測地系に則って位置関係を示しており、記載した方位は座標北を、標高は東京湾平均海面（T.P.+）を用いている。

第1章 調査の経緯と経過

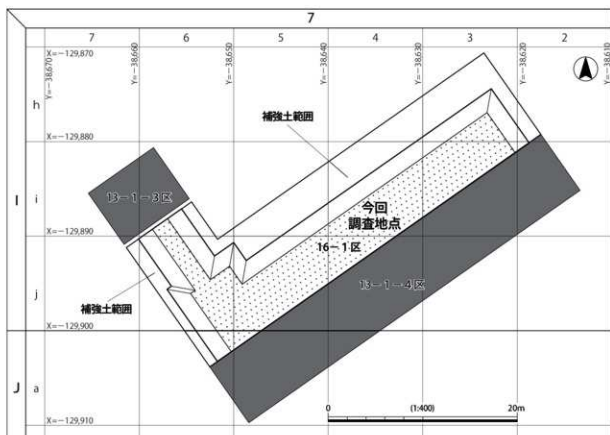
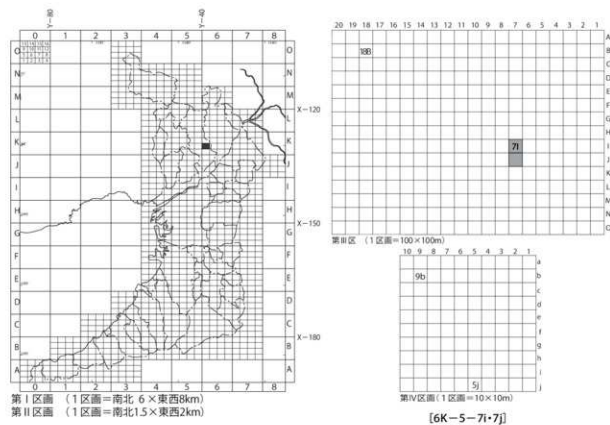


図3. 地区割と調査区配置図

遺構等の記録写真は、6×7カメラと35mmカメラを用いて撮影し、いずれも白黒とカラーリバーサルのフィルムを使用した。それと併せてメモ写真用にコンパクトデジタルカメラを使用した。また全景写真については、施工業者の協力のもと線路軌道敷部分や北側マンション屋上部分から撮影している。

自然科学分析 今回の発掘調査では、活発な河川堆積作用によって形成された起伏のある旧地形が、古墳時代中期の短期間のうちに平坦化することが判明した。こうした地形発達過程と遺跡の性格を理解するために、該当する第4層を中心に土壌構造と形成要因を細かく把握する必要があるため、軟X線写真撮影による土壌構造分析を業務委託して実施した。その成果については第4章にて掲載するとともに、報文や総括のなかで適宜触れている。

整理作業と報告書作成 整理作業は平成29（2017）年1月18日から3月31日にかけて当センター中部調査事務所で実施した。発掘調査で出土した遺物は、土器類を中心にコンテナ箱で30箱を数え、そのほとんどが古墳時代の土師器と須恵器である。出土遺物は洗浄したのち、登録番号ごとにデジタルカメラでメモ写真を撮影して台帳を作成しており、随時その内容を把握できるように保存・管理している。これらの遺物は分類と抽出をした上で復元作業をおこない、報告書に掲載する遺物を図化して必要に応じて拓本をとった。注記については「ソウジジ16-1-（登録番号）」と記載している。

報告書に掲載する挿図は、現地で作成した遺構図および遺物実測図をスキャンしたのち、Adobe社製Illustrator CS6を用いて浄書した。遺構写真は台帳を作成して一括管理しており、このうち報告書に掲載するものを選定してデジタル化した。遺物写真は掲載遺物の中から代表的なものを選定し、中部調査事務所写真室で撮影した。このほかに、報告文の末尾には土器類の遺物一覧表を付記した。掲載した遺物の分類や年代観・編年観は、特に断りがない限り凡例の各文献に拠っている。報告書の編集作業はAdobe社製Indesign CS6を用いておこない、デジタルデータにて入稿して報告書を印刷した。

出土遺物と各種記録類については、当センター中部調査事務所に保存・管理している。今後は調査成果の積極的な活用をお願いしたい。

第2章. 位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

総持寺遺跡は茨木市南東部の三島丘一・二丁目、三島町、総持寺一丁目、総持寺駅前町、西河原一丁目、庄一丁目にまたがる弥生時代～中世の複合遺跡で、南北450m、東西750mの範囲に及ぶ(図4)。このうち今回の調査地点は遺跡南西部の西河原一丁目・庄一丁目地内で、総持寺境内から西500mに調査地は位置する。明治21年(1888)公布の市制・町村制下では三島郡三島村にあたり、大字(旧村)総持寺と西河原の範囲に遺跡は及んでいる。

地理的には富田台地とよばれる北摂山地から南に派生した低位段丘上と、その南西側の沖積面に遺跡はまたがっており、今回の調査地点は低地部の沖積面にあたる¹⁾。

周辺一帯の歴史的な展開を簡潔に述べると、調査地一帯は律令制下の摂津国嶋下郡新屋郷にあたりと考えられており、もともとは嶋上郡とあわせて大化前代は三島と呼ばれる一体的な地域であったが、当遺跡の東端に茨木市と高槻市の境界があり、この付近が郡境界であったと考えられている。三島では淀川北岸でまとまった平野部が控えており、東から榎尾川・芥川・安威川の各主要河川が淀川にむかって南流するが、これらの主要河川の流域ごとに各時代の遺跡が展開することが知られる。総持寺遺跡が位置する安威川流域を中心にその動向を述べると、縄文時代中期後半以降の寒冷化に伴う海退によって沖積低地とその周辺に徐々に遺跡が展開するようになり、当遺跡のほか上流の耳原・五日市東、下流の牟礼、対岸の部などの各遺跡で縄文時代(主に晩期)の遺構・遺物が確認されている。弥生時代以降は三島の主要河川ごとに拠点的な大規模集落が前期から展開するようになるが、このような大規模集落は今のところ安威川流域では未確認で、対岸の郡遺跡、倍賀遺跡がその候補になる。このほかに当遺跡をはじめとして安威・耳原・五日市・太田・鮎川・溝作・牟礼・目垣の各遺跡で弥生時代の遺構・遺物が確認されており、このうち耳原遺跡や目垣遺跡などは存続期間が比較的に長い。

今回の報告において最も関連が深い古墳時代の動向については、安威川下流の溝作遺跡が庄内期～前期にかけての中核的な集落遺跡で、外來系土器の出土も多いことから対外交流の窓口としての性格を備えている。このほかに流域一帯とその周辺では前期の集落遺跡は今のところ少ないが、茨木丘陵上の末端部には紫金山古墳や将軍山古墳、安威古墳群など前期中頃～後半を中心とした時期の首長墓が展開しており、淀川流域の中でも有力な地域のひとつとみなしてよい。

中期に入ると当遺跡のほか安威・太田・部などの上流域の各遺跡で集落が展開しはじめるが、この中でも北西対岸2kmに位置する安威遺跡では初期須恵器・韓式系土器とともに畿内でも特に古い時期の造り付け竈などが検出されており、当地域での渡來人の定着を如実に示す遺跡として重要である。このような集落の動向と前後して富田台地とその周辺には首長墓が展開するようになり、なかでも中期前半の太田茶白山古墳は大王墓と比肩する規模・規格を備え、このほかに中期初頭～後半にかけては太田石山・土保山・二子山・番山の各古墳が一連の系譜として継続する。さらに台地の西から南にかけては総持寺古墳群や太田古墳群などの初期群集墳が分布しており、こうした一連の古墳の多くは土室の谷奥に位置する新池窯から埴輪の供給を受けていることが知られる。特に新池窯は応神陵古墳をはじめとする河内中樞の埴輪製作技術を駆使して埴輪生産がおこなわれていたことが判明しており、その中でも総持寺古墳群は新池窯の開窯初期から埴輪の供給を継続的に受けていた点で重要な位置を占める。

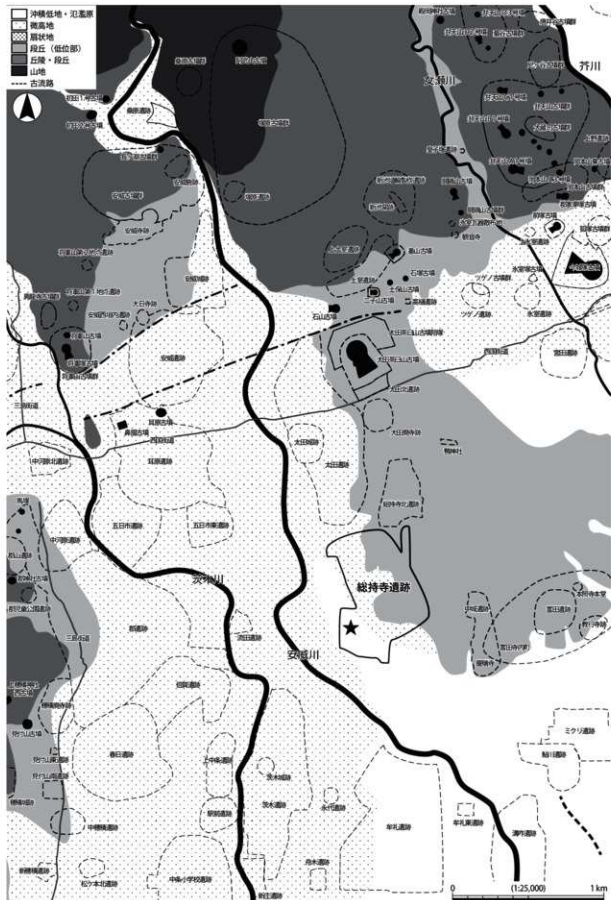


図4. 総持寺遺跡の位置と周辺地形・遺跡分布

第2章 位置と環境

表1. 総持寺遺跡発掘調査履歴一覧

調査組織	調査名	調査期間	所在地	調査区 (㎡)	主な遺構	主な遺物	報告書	
市教委 (563年度)	1988.7	総持寺	境内	-	築物基礎	軒瓦(鎌倉～室町)、瓦葺114G	市史2 (西史)	
市教委 H3年度	(1991)	総持寺1丁目	境内	-	前期:瓦葺2基、朝日山跡遺跡	-	市史2 (西史)	
市教委 H3年度	(1991)	総持寺1丁目	低地	1200	弥生～古墳・溝・柱穴	弥生土器類	市史19年度 (西史)	
府教委	1994.9～1995.3	三島丘2丁目	台地	23530	弥生前期: 竪穴建物3	弥生土器類	府1・2	
	弥生中期: 竪穴建物3				弥生土器類			
	古墳前期: 総持寺遺跡(43基)				古墳前期遺跡・古墳前期・前期古墳跡・古墳後期			
	古代: 竪穴建物9棟・竪穴建物120棟以上 土坑・井戸など				土器類、土師器			
	中世: 竪穴建物・竪穴建物120棟以上 土坑・土壇など				白磁・土師器、瓦葺			
市教委 H7年度	(1995)	総持寺1丁目	低地	920	縄文前期～弥生前期、平安中期 土坑、建物跡、柱穴	縄文土器 須磨; 益野式土器(～近江式V)	市史 (西史19年度)	
市教委 H8年度	(1996)	西河原1丁目	低地	-	古墳群跡	-	-	
市教委 H9年度	1997.7～8	総持寺1丁目	低地	203	古墳・建物跡、土坑・建物、溝、柱穴 平安中期～中世: 竪穴建物跡	埴輪類など	市史10～19年度 (西史19年度)	
市教委 H10年度	1998.5～6	西河原2丁目	低地	260	縄文前期～中世: 溝・土坑・竪穴	-	市史10～19年度 (西史19年度)	
市教委 H14年度	2002.3～5	総持寺1丁目	低地	521	竪穴・竪穴、溝、柱穴(古墳)、瓦葺跡(中世)	弥生土器・土師器・須磨器、瓦葺、瓦(平安～中世)	市史14年度	
大文セ	02-1 03-1	2002.10～2003.2	三島丘1丁目	台地	3113	弥生前期: 溝 古代(7～10): 竪穴建物7棟(70)、竪穴建物 16棟以上、溝・土坑ほか	弥生土器 須磨器、土師器	大文セ2
	2002.12～2003.3	三島丘2丁目	台地	3113	中世(12～13): 竪穴、溝	瓦葺跡		
市教委 H14年度	2002.12～2013.3	総持寺1丁目	境内	120	瓦葺跡 瓦葺中世、溝・柱穴(古墳・石室) 近世	弥生土器(V型柱穴)、土師器、須磨器(古墳) 瓦、土師器、埴輪	市史15年度 (西史19年度)	
市教委 H16年度	2004.5～6	三島丘1丁目	台地	1862	竪穴建物、竪穴建物跡	古墳前期～古墳	市史16年度	
市教委 H17年度 (5305-1)	2005.5～6 2005.10	三島丘2丁目	台地	681	(7～9世紀築、11世紀?) 竪穴建物11棟 ・柱穴5、竪穴建物1棟、溝110m以上土坑、井戸 ・竪穴・柱穴	土師器、須磨器、陶器類	市史17年度	
市教委 H18年度 (5306-2)	2007.1～2	総持寺1丁目	低地	203	弥生前期～中世: 溝・柱穴・土坑・竪穴 弥生前期～古墳前期: 溝・土坑・柱穴など遺構 古墳前期: 竪穴建物2棟・土坑遺構・溝・土坑ほか 古代～中世: 突石柱(軒柱建物 跡) 突石柱	縄文土器 須磨; 弥生土器、土師器、須磨器 ・石室	市史19年度	
市教委 H19年度 (5307-1)	2007.12～2008.7	庄1丁目	低地	6750	弥生前期: 竪穴建物1棟・溝 平安～中世: 竪穴建物 弥生前期: 竪穴建物1棟・溝3基・柱穴 弥生前期～古墳前期: 溝・土坑・柱穴など遺構 古墳前期: 竪穴建物2棟・土坑遺構・溝・土坑ほか 古代～中世: 突石柱(軒柱建物 跡) 突石柱	縄文土器 須磨; 弥生土器、土師器、須磨器 ・石室	市史21年度	
市教委 H20年度	2009.1～2	庄1丁目	低地	2800	古墳前期: 竪穴建物1棟・溝 平安～中世: 竪穴建物	土師器、須磨器(古墳前期)	市史21年度	
市教委 S110-2	2011.3	三島丘1丁目	低地	8	9世紀末～高麗期遺跡	瓦葺	市史23年度	
市教委 S112-2	2012.8	西河原2丁目	低地	225	溝跡、井戸跡 遺構不明	瓦葺	市史24年度	
大文セ	13-1	2013.8～2014.4	西河原1丁目 庄1丁目	低地	423	河内群 弥生後期、古墳前期	弥生土器 土師器、須磨器、製土器、前期古墳跡、須磨式土 土師器、須磨器、瓦葺、須磨	大文セ3
	16-1	2016.11～2017.1	庄1丁目	低地	216	古墳前期～古代: 竪穴建物	-	本書

【文獻】

市史●年度: 京都市教育委員会発行『平成●年度発掘調査報告』

市史: 豊田節郎・奥井哲秀ほか2014『新編 京都市史』第7巻 史料編 考古

府1: 豊和之・小浜成・阿部幸一・山上弘・三比呂一・田中智子 2005『総持寺遺跡』大阪府歴史文化財調査報告 2004-2 大阪府教育委員会

府2: 豊和之・阿部幸一・山上弘 2007『総持寺遺跡Ⅱ』大阪府歴史文化財調査報告 2006-5 大阪府教育委員会

大文セ2: 市本秀三・徳田真美恵 2004『総持寺遺跡Ⅲ』(編) 大阪府文化財センター調査報告書 第117集

大文セ3: 奥村茂輝 2014『総持寺遺跡Ⅳ』(公訳) 大阪府文化財センター調査報告書 第250集

※ 大文セ発行『総持寺遺跡』(第30集)については、総持寺北遺跡の範囲に含まれる

後期に入ると富田台地の東端を区切る女満川のさらに東で、真の継体陵である今城塚古墳が造営されることから、三島の地域が畿内の中でもより一層重要な地域として認識されるようになる。嶋下地域では西の福井や耳原に南塚古墳をはじめとする一連の系譜があり、安城川流域一帯では後期後半以降に左岸の塚原古墳群が大規模群集墳として展開し、終末期には茨木丘陵前面の最高所に阿武山古墳が築造される。同時期には太田産寺などの古代寺院も展開し、集落遺跡については当遺跡をはじめとして嶋下地域の沖積地周辺で増加するが、特に古代以降は部家の所在地と推測される部遺跡が中核を占めるようになる。

平安時代以降の当地域は藤原摂関家とゆかりの深い地域として知られ、調査地点から東 500 m に位置する総持寺は北家藤原山蔭によって元慶三(879)年に建立され、そののち一条天皇の勅使所となったことは著名である。また延喜式内社が嶋下地域には多く、特に調査地の北 500 m に位置する新屋坐天照御魂神社(西河原社)は社格が高く、古代の史料に名前が多くみえる点で当遺跡周辺一帯の重要性を示すものと思われる。当遺跡の台地上では平安時代以降も集落が継続して中世には屋敷地が成立する。

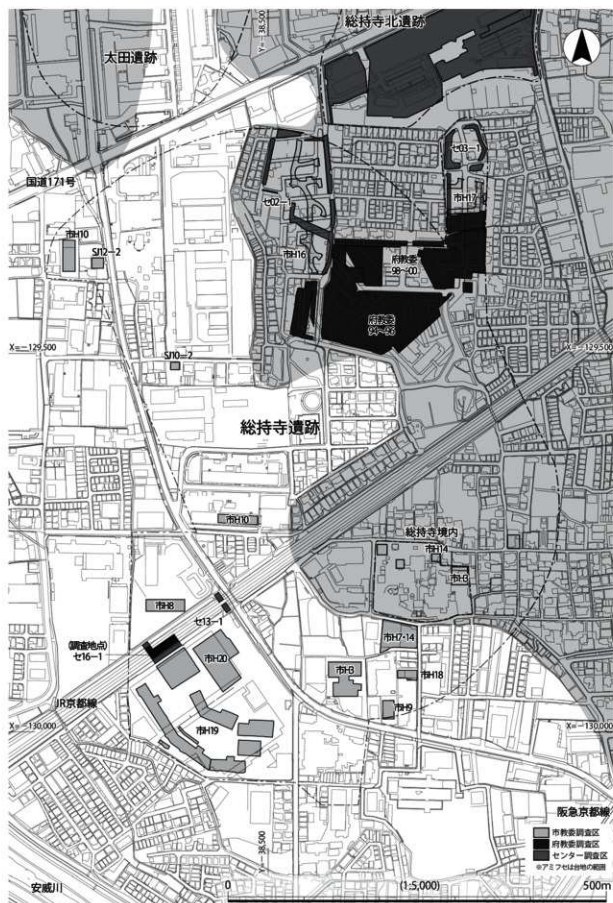


図5. 総持寺遺跡における既往の調査地点

第2章 位置と環境

このほかには宿久庄・郡・玉櫛の各遺跡の調査例などが、この地域の平安時代～中世の村落の具体像を示す成果と言えるだろう。

第2節 既往の調査成果

総持寺遺跡の範囲内はほぼ全域で開発が進んでいるため、現在では表層的な地形を確認することができないが、平成6年度(1994)以降、茨木市教育委員会(以下市教委)・大阪府教育委員会(現大阪府教育庁、以下府教委)・当センターの各組織によって発掘調査が実施されており、遺跡の具体像が判明しつつある。既往の調査地点と主な成果については、図5・表1にてまとめたが、北東側の台地上と南西側の沖積低地で調査は主に進められている。このうち調査地北東の富田台地上では弥生時代後期後半の円形周溝墓、古墳時代中期の初期群集墳、古代～中世の集落跡(府教委)などが確認されており、弥生時代後期の遺構の一部と古代～中世の集落は北側に隣接する総持寺北遺跡にも拡がりを見せる。このほかには総持寺境内では鎌倉時代の基壇や室町時代の瓦窯など総持寺に関連する遺構が確認され(市教委H3)、境内南面の沖積地帯では縄文時代晩期～弥生時代中期の遺物の出土が確認されている(市教委H7・18)。

今回の調査成果とも関連する低地部については、平成8年度の市教委による事業地の北側隣接地の調査で遺跡の拡がりか確認された(市教委H8)。近年では、事業地の南側隣接地における市教委の一連の調査(市教委H19・20)において、弥生時代後期から古墳時代中期の集落跡や河川跡、古代以降の耕作地跡などが確認され、調査成果が蓄積されつつある。当センターによる平成25・26年度の1期調査(大文セ13-1)でも、市教委の調査成果を追認するように古墳時代中期の造り付け竈を伴う竪穴建物や流路などが検出されている。特に古墳時代中期の集落跡については、時期的にみて北東台地上に位置する古墳群との関りが推測できることから重要性が高く、遺跡の全体像や構造の解明が待たれるところである。

【文献註】

- 1) 周辺の地理・地形環境については、下記の文献を参照した。
茨木市史編さん委員会編 2004『新修 茨木市史』第八巻 史料編 地理
茨木市史編さん委員会編 2012『新修 茨木市史』第一巻 通史 I
- 2) 周辺の歴史的環境や発掘調査の成果については、表5の各文獻や、註1) 茨木市史編さん委員会編 2012などを参照した。
- 3) 当センター発行の報告書『総持寺遺跡』の調査地点については、総持寺北遺跡の範囲に含まれる。
岡本圭司・秋山浩三・久家隆芳 1998『総持寺遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第30集

第3章. 発掘調査の成果

第1節 基本層序

調査区の北壁で断面図を作成し、基本層序として第1層～第6層に大別した。第1層の上面には近現代の耕作土とJR京都線の盛土があるが、これについては機械掘削にて除去した。人力掘削によって調査の対象とした層のうち、第1層～第3層までが中世から古墳時代後期までの耕作土層、第4層と第5層がそれぞれ古墳時代中期と前期を中心とした時期の堆積層である。その下部には第6層として古墳時代初頭以前の河川堆積を確認したが、この層の上面付近が掘削限界であったため、上面の部分的な掘削とトレンチによる層序の確認に留まっている。さらに各層を時期ごとに枝番を振って細分し、形成要因が異なる層はアルファベットを振ってそれぞれ区別した。

なお、1期調査3・4区における層序との対応関係については、第4～2層まではおおよそ対応するように努めたが、第4～3層以下の堆積については1期調査では部分的なトレンチによる確認に留まっていたことから、今回の調査で層順が逆転している箇所が確認できた。これについては以下の報告で逐一述べることにしたい。

第1層～第3層 いずれも調査区全域に水平に堆積する安定した耕作土層で、上面の第1層と第2～1層は下層に比べるとやや粒径の粗い極細砂を主体とするのに対し、第2～2層以下はシルト～粘質シルトを主体とする。色調は第2～1層が酸化したやや明るい明黄褐色を呈するが、その他の層はいずれも緑灰色気味の色調を呈する。

各層の形成年代については、出土遺物から第1層が室町時代以降、第2～1層が鎌倉時代頃（13世紀）、第2～2層が平安時代後半頃（10～12世紀）、第3～1層が奈良時代後半～平安時代前半頃（8世紀後半～9世紀）の形成と判断できる。第3～2層については、出土した遺物のほぼ全てが第4層出土と同様の古墳時代中期の遺物であり、形成時期を明確に示すような遺物の出土はない。下部の第4～1層の形成時期が古墳時代中期後半（5世紀後半～末）であることから、古墳時代後期～奈良時代前半（6世紀～8世紀前半）までの間のいずれかに形成されたことが推測できるが、詳細な時期については不明である。また、第3～1層までの各除去面では条里地割に即した正方位の耕作溝群が確認されている。

なお、下層に比べると上面の第1層・第2～1層がやや粒径が粗くなることについては、調査地点が安威川右岸の氾濫原に位置することと関係性が推測できる。つまり第2～2層以下の形成時は粘土などの細粒物質の堆積を主体とすることから安威川から離水した環境下に、第2～1層～第1層の形成時には氾濫堆積物で地表面が覆われるような状況下にそれぞれ置かれていた可能性が推測でき、このような所見から安威川の河床の上昇が鎌倉時代以降に徐々に進行していたことを窺わせる。

第4層 古墳時代前期後半～古墳時代中期後半までの堆積層で、さらに3時期に細分できるが地点ごとに層相は大きく異なっている。上層の第3～2層までは安定した水平堆積がみられたのに対して、第4層以下の堆積によって形成された地形は起伏に富んでおり、時期が下るにつれて徐々に埋没して平坦化していく様子が確認できる。下部ではそれぞれ古墳時代初頭以前と古墳時代前期の河川が位置する調査区の東端と中央西寄り、それぞれ自然堤防上の高まりになっていたことが判明しており、やや古い時期の河川の堆積作用がこうした地形の起伏を生む要因となっていたことが判断できる。このうち第4～1層と第4～2層はいずれも緑灰色系の極細砂の堆積であるが、調査区東端高まりは居住域となってい

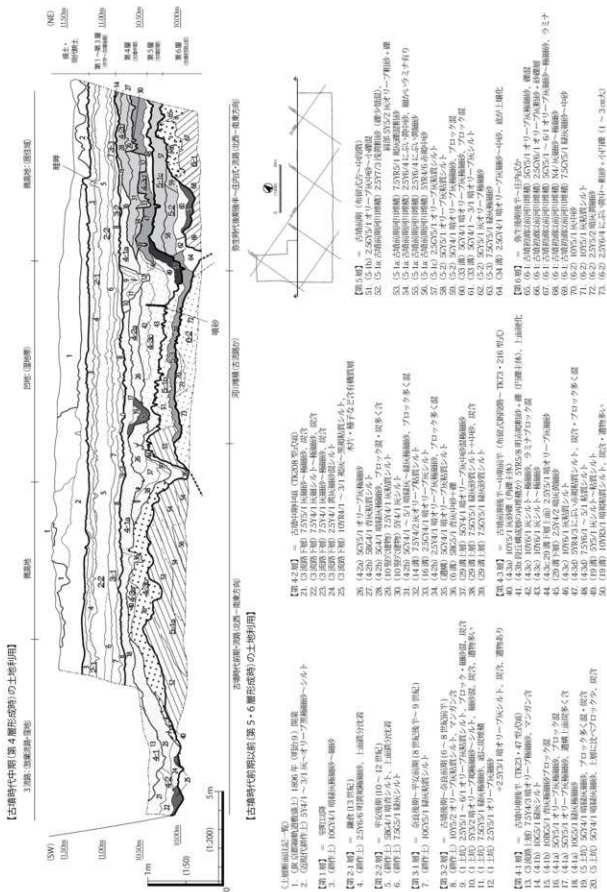


図6. 基本層序 (北壁断面)

たため土壌化しており、炭化物や土器片などを多く含む暗緑灰色の極細砂～粘質土を主体とする（4-1 b・4-2 b）。第4-3層については地点によって層相が大きく異なるが、調査区の中央西寄りでは粗砂混じり礫層が堆積しており、上面は灰色で角礫を（4-3 a）、下半は明赤褐色で円礫を（4-3 b）それぞれ主体とする。このうち下半の（4-3 b）については特に淘法が悪く、堆積物の特徴から富田台地の段丘構成層の二次的堆積の可能性が推測でき、1期調査の第9層はこれに該当する。中央東寄りは凹地になっており、そこには上層部分と類似した緑灰～灰色の極細砂～シルトが堆積するが、上層に比べると粒径はやや細かい（4-3 c）。東端については炭化物や土器の細片を含むにふい赤褐色の粘質土を主体とする（4-3 d）。第4層の各層からはまとまって量の出土遺物があり、第4-1層が古墳時代中期後半（5世紀後半）、第4-2層が古墳時代中期中頃（5世紀中頃）、第4-3層が古墳時代前期後半～中期前半（4世紀後半～5世紀前半）の形成と判断できる。

第5層 古墳時代前期に形成された堆積層で3時期に細分できる。調査区東端が高く西側にむかって低くなっており、東側の高まり部分はオリブ灰色の粘質土を主体とする堆積（5-1 c・5-2）で、上面の古墳時代中期と同様に北東側に当該期の居住域が広がるのが予想される。その一方で、中央～西側には北西～南北方向の自然流路の存在が把握でき（5-1 a）、浅黄色やにふい黄色の細砂～中砂を主体とする河川堆積層が確認された。ただし、底面は掘削限界よりもさらに深くなることが判明しており、流路の全容を把握するには至っていない。

第6層以下 上述した通り掘削限界に達したため上面の掘削とトレンチによる部分的な確認に留まっている。このうち調査区の東端では、弥生時代後期後半～庄内期ごろのオリブ灰～緑灰色の中砂を主体とする河川堆積層（6-1）が確認でき、東側に向かって落ち込むことが把握できた。第5層除去面に存在する古墳時代前期の流路の東側に並行して位置しているようであり、上面の古墳時代前期と中期の居住域はこの流路が埋没してできた微高地上に形成されたことがわかる。

第2節 第1層～第3層関連の遺構と遺物（中世～古墳時代後期）

第1層～第3-2層はいずれも耕作土層で、第1層・第2-1層・第2-2層・第3-2層の各除去面で遺構検出をおこなった。以下、各層の特徴と除去面の遺構、および出土遺物について所見を述べる。

（1）第1層（図7左）

暗緑灰の極細砂～細砂を主体とし、層厚は0.05～0.1 m前後である。上面の近現代の耕作層に比べるとやや明るく、下部では鉄分・マンガンの沈着がみられた。除去面の標高はTP+11.15～11.05 mで、東側が僅かに高い。東西・南北方向の耕作溝群が検出され、いずれも幅0.2～0.3 m、深さ0.1 m以下で浅い（図7）。先後関係から総じて東西方向の溝が古く、南北方向の溝が新しい傾向にある。また、後述するように下部の第2-1層除去面では、調査区東端Y=-38.631 ライン付近で畦畔が1本確認されているが、北壁断面を観察する限り畦状の隆起が第1層上面および近現代耕作土上面でも確認でき、さらにその部分では耕作溝がみられないため、畦畔が存在していた可能性が高い。

第1層中から出土した遺物には、土師器・須恵器・瓦器・黒色土器・陶器類があり、いずれも破片で出土量は総じて少ない。図化可能な遺物としては中世須恵器のすり鉢（1）と壺（2）があり、これらは鎌倉時代後半～室町時代前半頃の所産である。このほかには近世に下る陶器の出土が1点のみみられ

第3章 発掘調査の成果

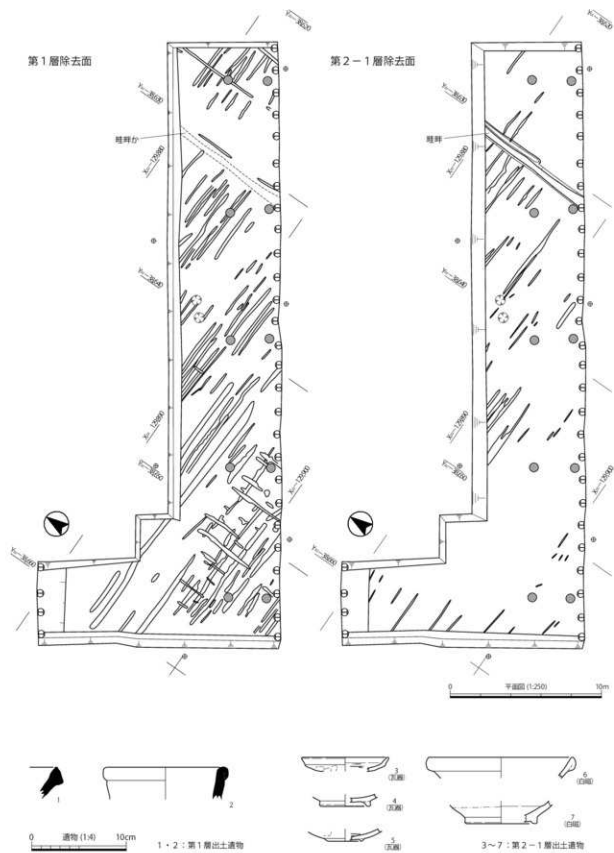


図7. 第1層・第2-1層除去面 全体平面図・出土遺物

るが、これについては混入の可能性もある。以上の点から、第1層の形成時期は鎌倉時代後半～室町時代頃(13～14世紀)とみなすことができる。

(2) 第2-1層 (図7右)

上層に比べると明るい明黄褐の極細砂を主体とし、層厚は0.05～0.1m前後である。下部では鉄分の沈着がみられ、除去面の標高はT.P.+11.05～11.00mで、上面と同様に東側が僅かに高い。

東西方向の耕作溝群が検出されているが、上面に比べると遺構密度は低い(図7)。また、調査区東端の南北Y=-38.631ライン付近で畦畔が1本検出されている。第2-1層中から出土した遺物には、土師器・須恵器・瓦器・白磁があり、いずれも破片で出土量は少ない。ただし、上層よりは図化可能な遺物がやや多く、瓦器碗(4・5)や小皿(3)、白磁碗(6・7)などがある。いずれも平安時代後期～鎌倉時代(12～13世紀)の所産であり、第2-1層の形成時期は層中から出土した新しい時期の鎌倉時代頃(13世紀)とみなすことができる。



写真1. 第2-2層除去面 噴砂(東側)検出状況

(3) 第2-2層 (図8)

暗青～緑灰シルトを主体としており、上層に比べると粒径は細くなる。また部分的に細分が可能な範囲もみられる。層厚は0.2～0.25m前後で、下部では鉄分の沈着がみられた。除去面の標高はT.P.+10.9～10.8mで、上面と同様に東側が僅かに高い。上面と同様に東西・南北方向の耕作溝群が検出されており、溝は東西方向のものが多く傾向にある(図8)。また、南側の1期調査でもこの面で溝群が検出されており、概ね連続するような位置関係で確認されている。このほかに調査区の中央付近では、調査区に直交する方向で地震痕跡(噴砂)が2か所で確認されている(写真1)。

第2-2層中から出土した遺物には、土師器・須恵器・瓦器・黒色土器A類・B類、埴輪片、鉄釘があり、概ね9～12世紀頃を中心とする。このうち瓦器碗(12)や白磁(17)などが12世紀代の遺物で下限の時期を示すとともに、その一方で須恵器(14～16)など古代(主に9世紀代)の遺物が上層に比べて増える傾向もみられる。第2-2層はほかの耕作層に比べるとやや層厚があり、後述する下層からの出土遺物の年代観を加味すると平安時代後期(10～12世紀頃)の形成と判断できる。

(4) 第3層 (図9～11)

第3-1層と第3-2層に細分でき、それぞれ緑灰とオリーブ灰の粘質シルトを主体とする。層厚は第3-1層・第3-2層ともに0.05～0.1m程度であるが、調査区の西側では層境が不明瞭になる。このため第3-1層除去面では、面的に遺構を見出すことができなかったが、上面と同様の耕作溝群が存在することを目視で把握している。一方で第3-2層除去面では、正方位の耕作溝群が検出されておらず、調査区の東寄りか西寄りでそれぞれ不定形の土坑を1基ずつ検出した。南側の1期調査でも、この面では不定形の土坑や柱穴がまばらに検出されており、よく似た様相を呈する。第3-2層除去面の標高はT.P.+10.85～10.65mで、上面と同様に東側が僅かに高い。

第3-1層中からは古墳時代または古代の土師器・須恵器・灰軸陶器が、第3-2層中からは古墳時

第3章 発掘調査の成果

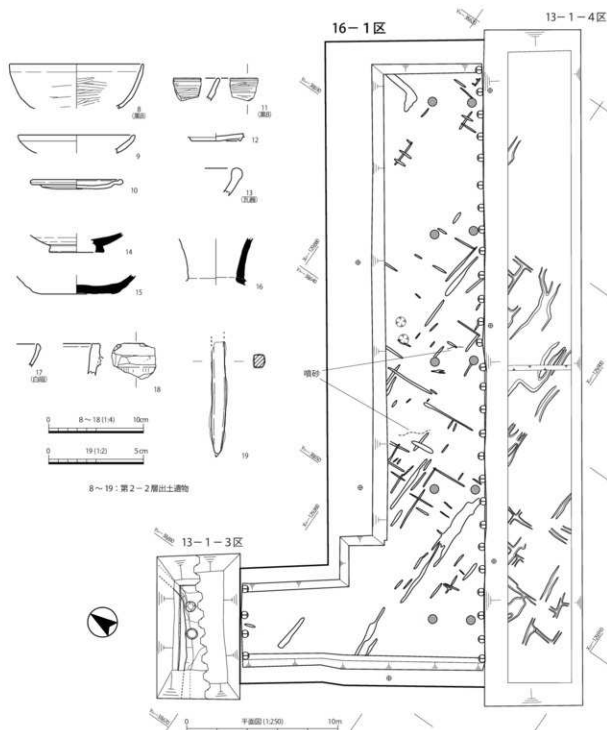


図8. 第2-2層除去面 全体平面図・出土遺物

代の土師器・須恵器がそれぞれ出土している。第3-1層から出土した須恵器杯A(20)と灰軸陶器碗(21)は8世紀後半~9世紀の所産で、この層の形成時期の一端を示すとともに、条里地割に即した正方位の地割が奈良時代後半には出現していたことを示唆する。一方で、第3-2層中から出土した遺物は、時期が不明の土鍾(24)を除けば、いずれも後述する第4層と同様の古墳時代中期の遺物(22・23)であり、層の形成時期は明確でない。現状では、上層と下層の出土遺物の年代観から古墳時代後期~奈良時代頃に形成されたことが推測でき、第2-2層~第4-1層の間の側溝中から出土した古墳時代後期中頃(TK10~43型式)の須恵器杯身(25)は層の形成時期の一端を示している可能性がある。

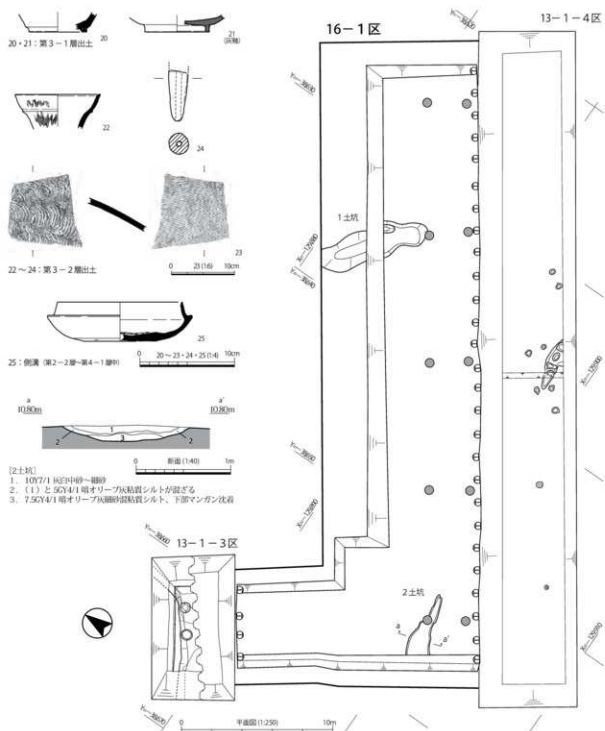


図9. 第3-2層除去面 全体平面図・出土遺物・2土坑断面

また、第3-2層除去面で検出された遺構のうち、東寄りの1土坑では古墳時代中期中頃～後半（TK208～23型式）の遺物がまとめて出土しており、古墳時代中期後半に形成された層が削平を受けて第3-2層が形成された可能性が高いと判断できる。

1土坑（図10・11） 調査区の東寄りに位置する縦に長い形状の土坑で、調査区内で南半分が検出できたが、北半分は立会対象範囲での検出になったため、その範囲については略測によるものである。北西端の一部が僅かに範囲外に及んでいるが、全容は概ね把握できており、長さが7.3m以上、最大幅2.4mをはかる。埋土のうち下半の（4・5）については別遺構の埋土の可能性があり、底面（5）までの深

第3章 発掘調査の成果

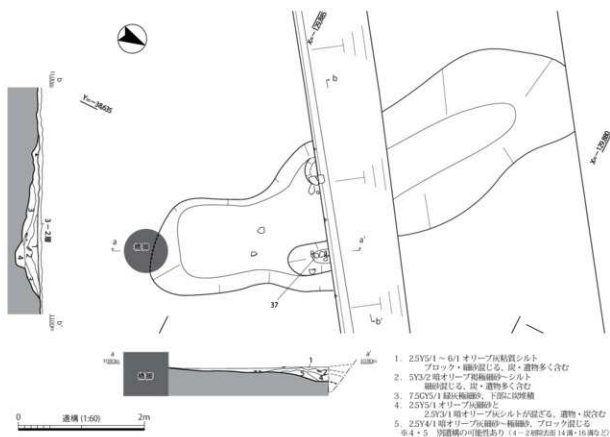


図 10. 1土坑 平面・断面

さは0.35mであるが、検出面から有機質土（1～3）の底面までの深さは0.24mである。上半（1～3）のうち（2）はオリーブ褐極細シルトを主体とする有機質層で、炭化物を多く含み、まとまった量の遺物が出土しているが、上層（1）は粘性が強く、やや性質が異なっており、堆積状況が異なると判断できる。また、遺物は立会範囲の北寄りに特に集中する傾向がみられ、可能な範囲で遺物の回収をおこなった。遺物の形状や堆積状況、遺物の出土状況などから廃棄土坑とみなすことができる。

埋土から出土した遺物は、土師器や須恵器、製塩土器、砥石、滑石製玉類などがあり、このほかに微細な鉄塊などが確認されている（26～64）。土器類のうち、供膳具は土師器杯（50）を除くと大半が須恵器の杯類（26～40）で、口径がやや大きい12cm前後の一群と、小型化した10cm前後の一群に大きくは分けられる。煮炊具のうち、甕は布留形甕（52）のほか、外反形の甕（53）と中型甕（51）が伴い、甕には外面タタキ（54）とハケ（55）の個体がある。製塩土器は特に北側の立会範囲でまとまった量がみられ、可能な範囲で埋土ごと取り上げをおこなったところ、回収できた範囲での総重量が310.7gにのぼることが把握できた。内外面をナデ・ユビオサエ成形する個体が主体を占めるが、外面タタキの個体（62）も僅かにみられる。このほかに滑石製白玉1点（63）や砥石（64）などが確認できる。出土した遺物はいずれも古墳時代中期中頃～後半に帰属するものであり、須恵器の杯類などからTK208～23型式頃（5世紀後半）までの時期幅が想定できる。

2土坑（図9） 調査区の西端に位置する長さ4.0m、最大幅1.5mをはかる不定形の土坑で、深さは0.08mで浅い。埋土は灰白の中砂～細砂を主体とし、下部には暗オリーブ灰の粘質シルトが溜まる。出土遺物は土師器の細片が少量あるが、図化可能なものはない。1土坑と埋土の土質が大きく異なっているため、時期は異なる可能性があるが、遺物の性格や明確な帰属時期はいずれも不明である。

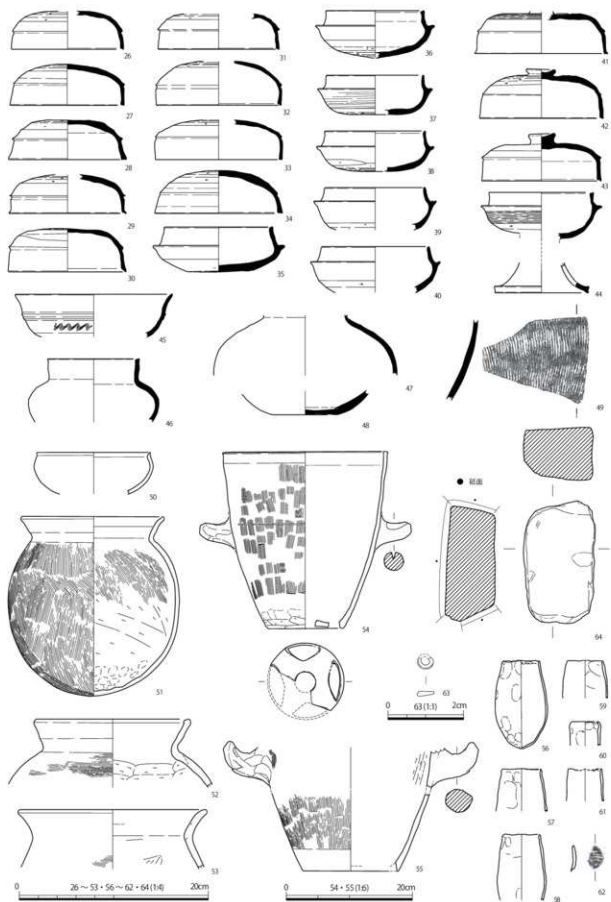


図 11. 1土坑 出土遺物

第3章 発掘調査の成果

(5) 小結

第1層～第3～1層までの各除去面では、正方位の耕作溝群がそれぞれ存在することが把握でき、各層から出土した遺物の年代観から、第1層除去面が室町時代（14世紀）以降、第2～1層除去面が鎌倉時代（13世紀代）、第2～2層除去面が平安時代後半（10～12世紀）、第3～1層除去面が奈良時代後半～平安時代前半（8世紀後半～9世紀）にそれぞれ帰属することが判明し、これについては1期調査や市教委による南側隣接地の調査とも概ね整合する。また、第3～2層については、上層と下層の出土遺物から形成時期は古墳時代後期～奈良時代頃と推測でき、耕作層と考えられるが、上面とは異なり不定形の土坑が散在している。このうち1土坑は出土遺物から古墳時代中期後半頃の廃棄土坑で、想定される層の形成時期と遺構の年代観に齟齬がみられるが、古墳時代中期後半以降に形成された層が削平を受けた可能性が要因のひとつとして考えることができる。

なお、富田台地上には飛鳥時代～中世（7～13世紀）の居住域が展開していたことが既往の調査成果から明らかとなっており、掘立柱建物などの居住関連遺構が数多く確認されている。このように総持寺遺跡における飛鳥時代以降の土地利用のあり方は、台地上の居住域と低地部の生産域とが明確に区別されており、さらに8世紀後半以降は条里地割に即した耕作地が低地部には拡がっていたことがわかる。

第3節 第4層関連の遺構と遺物（古墳時代前期後半～中期）

第4層は古墳時代前期後半～中期にかけて形成された堆積層で、3時期に分けることができる。古墳時代前期後半～中期の短い時間幅の中で、細分された層ごとに形成時期を限定することができ、各層の除去面ごとに遺構検出をおこなった。以下、各層の特徴と除去面の遺構、出土遺物について報告する。

(1) 第4-1層（図12～19）

第4-1層は暗緑灰またはオリブ灰の極細砂～シルトを主体とするが、調査区東側はやや土壌化しており、炭化物をやや多く含む傾向にある。これについては、後述するように下層の第4-2層除去面で竪穴建物等が検出されており、もともとは居住域であったことが要因とみられる。層厚は0.1～0.15m前後で、概ね水平に堆積しており、除去面の標高はT.P.+10.70～10.65m前後である。

除去面で検出された遺構には土器溜まりや土坑などがあり、調査区の西側では放棄化した3流路が検出されているが、土坑など明確な掘込みを有する遺構は少ない。ただし、完形の遺物も多く含む遺物がまとまって出土しているのが特徴で（写真2）、特に調査区の中央～西寄りの4土器溜まりとその周辺に遺物が集中している（図12）。ほぼ同一レベルで出土していることからいずれも同時期の投棄とみなすことができ、4土器溜まりでは費や平底鉢など小型品が組成の主体を占めるのに対し、周辺部では中～大型の土師器甕や甔が多い。この段階では調査周辺は水平に近い地形に復元できるが、後述するように元の地形は起伏に富んでおり、遺物の出土が集中する地点はもともと微高地上の高まり部分にあたる。直下の29溝とその周辺からもまとまって遺物が出土しており、下層と同様の土地利用のあり方が継続していたことがわかる。

なお、南側に隣接する1期調査においても同様にまとまって遺物の拡がり確認されており、さらに南の市教委H19年度P区までこの様相は続いているようである。今回の調査で確認された微高地が南側にもび、特に池状遺構とされるPSG II-O1から須恵器甕と土師器高杯が入れ子状で出土するなど、

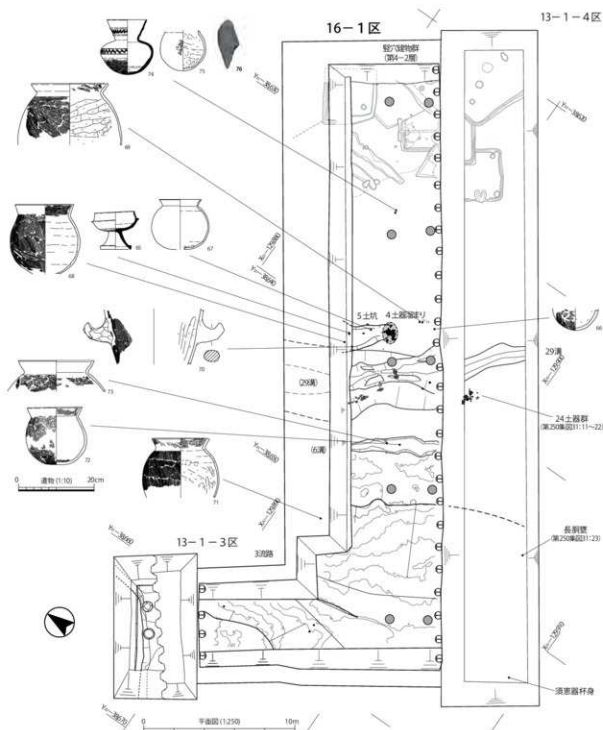


図12. 第4-1層除去面 全体平面図・遺物出土位置

復元率の高い遺物も多数出土していることから、関連する遺物群とみなすことができる。第4-1層除去面では建物跡などが検出されていないため、同時期に居住域が展開していたかどうかは不明であるが、前段階は集落の縁辺部であり、集落縁辺部における祭祀行為の一端を示すものと推測される。

第4-1層出土遺物 (図13・14) 第4-1層中から出土した遺物のうち、(65～70)が土器溜まり周辺からの出土遺物で、中～大型の土師器甕(66～69)や甕(70)などのほか、須恵器有蓋高杯(65)がある。やや東に離れた位置からは須恵器の直口壺(74)と土師器の小型甕(75)が出土しており、これとともに出土した棒状の石材(76)は、甕の支柱の可能性が推測できる。なお、須恵器直口壺(74)

第3章 発掘調査の成果

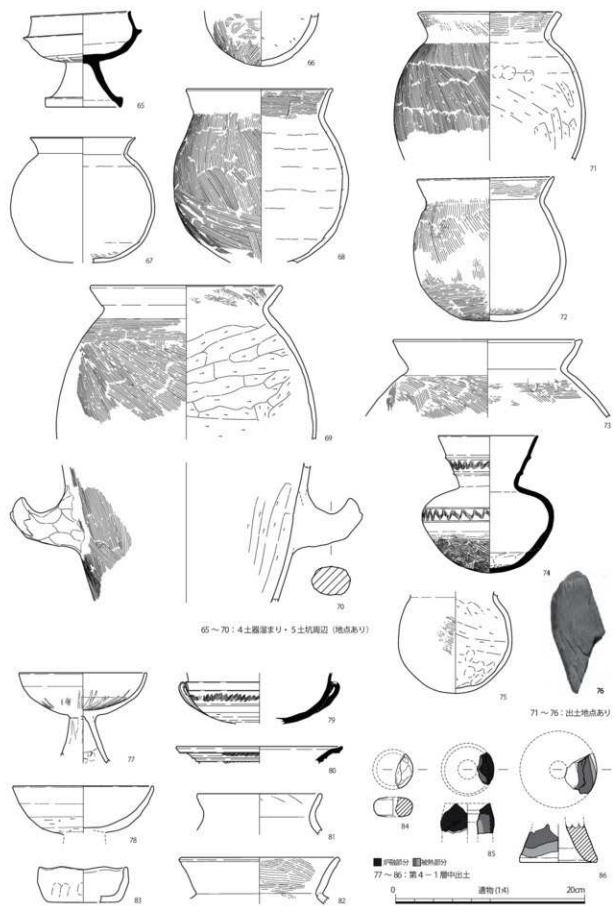


図13. 第4-1層 出土遺物(1)



写真2. 第4-1層 遺物出土状況

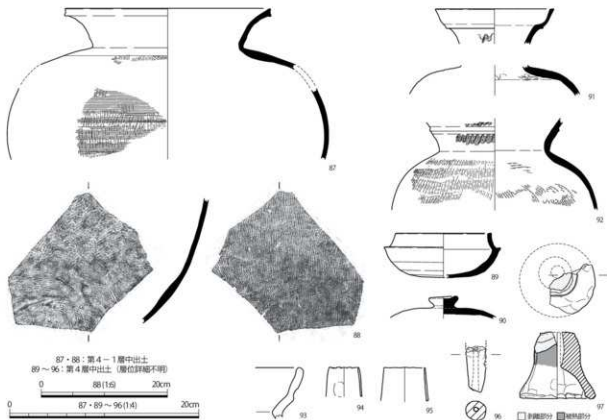


図14. 第4-1層 出土遺物(2)

第3章 発掘調査の成果

については、上層で検出された1土坑から出土した破片と接合する。このほかでは(77～88)が第4～1層中からの出土で、(89～97)は詳細な層位は不明であるが第4層中からの出土遺物である。

出土した土器類の特徴としては、供膳具には土師器の椀形高杯(77・78)とともに須恵器の高杯や杯類(65・79・89)がある。煮炊具は大型品に布留形甕(69・73)が含まれるが、中・小型品が増える傾向があり、これらについては口縁部が外反気味に開くもので占められる(68・71・72など)。調整は外面ハケのもので占められ、内面ケズリの個体とハケ・ナデで接合痕が目立つ個体の両者がみられる。容器類については今回の調査全体でも出土量がそれほど多くはなく、このうち須恵器甕の破片が一定程度出土するが、図化した(87)をはじめとして第4～1層中から出土した破片は焼成の悪いものが大半で、(88)のように内面は半スリ消しの個体が目立つ。中・小型品はさらに少なく、直口壺(74)は全体を復元できる数少ない個体で、底部外面にはタタキが残る。出土した遺物には年代を明確に示す須恵器の供膳具が少ないが、おおよそTK208～23型式頃に帰属するものであり、遺構からの出土遺物ではないが、層位的に上層・下層との前後関係が明確であることから、資料の一括性は高いといえる。

このほかでは手づくねの小型の鉢(83)や製塩土器(94・95)のほか、土製紡錘車(84)や鍛冶関連遺物(85・86・97)、土錘(96)などが含まれる。鍛冶関連遺物のうち羽口の先端部(85)は溶解して著しく発泡しており、底部(86)はハの字状に開く形態に復元できる。(97)については、図の上半が刺離・被熱しており、全形がやや短く内側の孔の径が小さくことから、羽口の可能性もあるが、断定はできない。こうした鍛冶関連遺物は、渡来系の要素が強い遺跡での出土事例が増えているが、北摂での出土例はまだまだ少なく、遺跡の性格を考える上で極めて重要な資料である。

4土器溜まり(図15・16) 調査区のほぼ中央、X=-129.895.5、Y=-38.638.5付近に位置する。中小型の土師器甕や平底鉢が6個体並ぶように据え置かれており(104～109)、その周囲からは須恵器の杯身や高杯(99・100)、土師器の小型丸底壺と高杯(101・102)、ミニチュア土器(98)、拳大の石材(111～114)などが出土している。据え置かれた土師器のうち、甕(104～107)、平底鉢(108・109)、小型丸底壺(101)、ミニチュア土器(98)の中に詰まった土を洗浄したところ、内部に滑石製の白玉が含まれていることを確認した。(98・105)では1～2点に限られるが、平均すると7・8点程度で、平底鉢(109)からは15点がまとまって出土しており、総点数は50点(115～164)を数える。南側の拳大の石材(111～114)は、いずれも緻密な砂岩～泥岩質の石材で、利器ではなく自然石とみられるが、明らかに土器類とともに据え置かれている。第4～1層中にはこうした石材は含まれないことから、人為的な据え置きとみなすことができるが、その性格は不明である。

この4土器溜まりが検出された高さはT.P.+10.7m前後で、周囲から出土している土師器の甕や壺・須恵器の高杯など(図13:65～70)もほぼ同一レベルであることから、関連性が高いと判断できる。先に述べたように、4土器溜まりで中小型品が多いのに対して、周辺出土遺物はやや大型の製品が多く、遺物の組成に違いがみられることから、当該期の祭祀行為の実態を理解する上でも良好な遺構である。なお、据え置かれた土師器の甕・平底鉢はいずれも上半部分が欠けた状態で出土しており、接合する破片も少ないことから、上面が削平を受けていた可能性が指摘できる。

出土遺物の所見については、須恵器の杯身(99)は口径9.8cmでやや小型化しており、有蓋高杯(100)は杯部の量目は杯身(99)と近く、小円孔のスカシは3方向である。いずれも焼成がやや甘く、TK23型式頃に位置づけられる。土師器の小型丸底壺(101)と椀形高杯(102)は、いずれも外面を赤色に仕上げられた精製品で、この2点は出土した位置関係からみてもセット関係が明白である。特に小型丸

底壺(101)については外面に細かなヨコミガキが施されており、この時期に丁寧なつくりのものが残る点で珍しい資料である。椀形高杯は外面ハケ調整で、器形などから辻福年4段階に位置づけることができ、須恵器の年代観とも矛盾はない。甕には小型品(103~106)と中型品(107)があり、このうち小型品の(103)は、全形が不明であるが底部は平底気味である。(104~107)については、磨減が著しい(105)を除き、外面がタテ・ナナメハケ、内面がケズリ調整で、口縁部は内湾気味に立ち上がるもの(104・105)と、直立またはやや外反気味に開くもの(106・107)がある。韓式系の器種の典型である平底鉢にも、小型品(108)と中型品(109)があり、いずれ器形や調整、器質が類似する。平底鉢は時期が下ると在地化して外面ハケ調整に変化するが、タタキの個体としては畿内でも最も新しい部類に入ることから、注目すべき資料である。なお、煮炊具とみなすことができるこれらの甕や平底鉢には、スズ等の付着はなく、実際に使用された形跡はみられない。

滑石製の玉類は出土した計50点のうち、黄色味がかった色調のA1類(24点)と灰色のA2類(18点)が主体を占めるが、これと分別が難しいA類(7点)を含めていずれも同一の石材とみられる。これ以外では灰白色のB類1点(125)は、やや光沢があり石材は明らかに異なる。径は大半が0.4~0.5cmに収まっておりばらつきは少ないが、厚みについては0.2~0.4cmまでややばらつきがある。いずれも上端・下端を縦・斜め方向に強く研磨して中央部がやや膨らむ形態に仕上げられており、上面が平に近い仕上がりで斜めの仕上がりのものである。径が概ね一致し、かついずれも同種の石材で中央部がやや膨らむ形態に仕上げられていることから規格性が高く、その一方で厚みや上面の仕上がりばらつきがある点については、仕上げの精度による個体差とみなすことができるだろう。なお、石材の質があまりよくないためか、剥離したものや一部が欠損するもの、細かなひび割れがみられるものも多い。

古墳時代中期の祭祀遺構としては、東国などで検出例が多い傾向があるものの、畿内でも類例が増加している。具体的な事例としては、天理市布留遺跡堂垣内地区石敷遺構²⁷などのような小型丸底壺をはじめとする小型の容器類を主体とする事例や、布留遺跡豊井内地区土器溜まり遺構²⁸や高槻市井尻遺跡196落込み²⁹などのような土師器の高杯などの供膳具を主体とする事例などが知られるが、いずれも特定の器種に偏り、土器類の内外には滑石製品が伴う例が多く、これに鉄器が伴う場合がある。4土器溜まりでは在来的な土師器甕のほかに韓式系の平底鉢が含まれることがひとつの特徴で、祭祀行為の主体者を考える上でひとつの手がかりを与えてくれる。類例としては五條市西河内堂遺跡³⁰が知られるものの、現在のところ事例は少なく、古墳時代の祭祀行為の具体像を考える上で重要な遺構である。

5 土坑(図17) 4土器溜まりの下半で検出した東西にやや長い不定形の土坑である。埋土にブロックや炭などが含まれていたが、遺構の輪郭はあまり明瞭ではない。調査区から北西側の立会範囲にむかっただのびることが予想されたが、機械掘削時に目視では十分に把握することができなかった。このため確認できた範囲での規模は長さ2.6m、幅1.5mをはかり、深さは0.28mである。埋土からの出土遺物は少ないが、土師器高杯の脚部(165)や、須恵器杯身(166・167)などがあり、いずれもTK208型式頃に位置づけることができる。

3 流路(図18・19) 調査区の西半に位置しており、全形は十分に把握できなかったが幅は12~14mで、検出面からの深さは0.8mである。埋土は大きくは上層(8~12)と下層(13~19)に分けることができ、基本層序との対応関係や後述する出土遺物の様相から上層が第4~1層に、下層が第4~2層にそれぞれ対応することがわかる。上層(8~12)は土壌化した粘質シルトを主体としているのに対して、下層(13~18)は上層に比べて粒径が粗い細砂や極細砂を主体としており、最下層(19)

第3章 発掘調査の成果

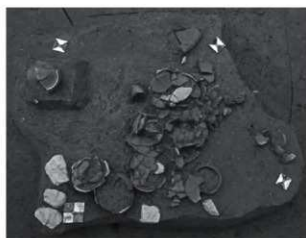
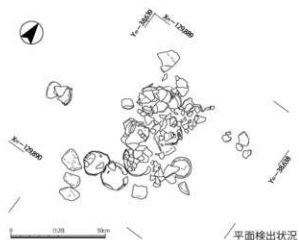


写真3. 4土器溜まり 遺物出土状況

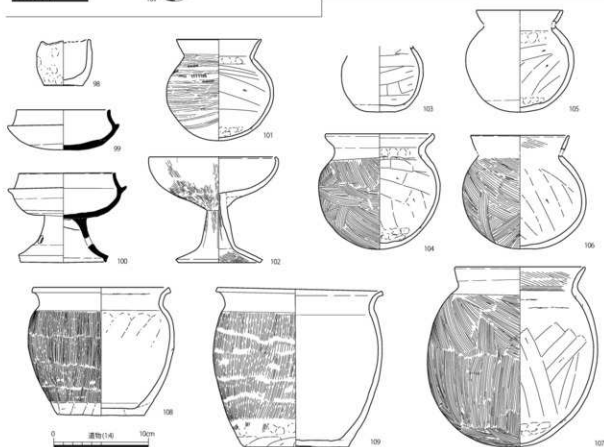
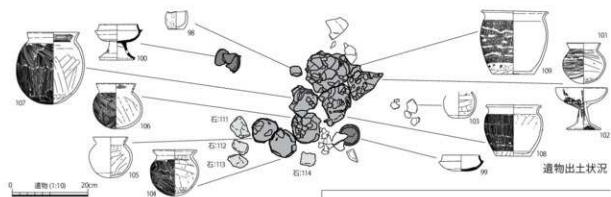


図15. 4土器溜まり 平面・遺物出土状況・出土遺物(1)

表 2. 4 土器溜まりほか玉類一覧

遺物番号	土器	高さ (cm)	口径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	石材	遺物番号	土器	高さ (cm)	口径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	石材	遺物番号	土器	高さ (cm)	口径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	石材
115	98	0.49	0.48	0.37	0.20	A1:黄	133	105	0.46	0.46	0.25	0.20	A1:黄	150	109	0.50	0.47	0.34	0.21	A1:灰
116		0.48	0.48	0.30	0.17	A1:黄	134	106	0.48	0.47	0.30	0.17	A1:灰	151		0.50	0.48	0.33	0.17	A1:灰
117	101	0.50	0.47	0.39	0.21	A1:灰	135	107	0.48	0.48	0.28	0.20	A1:黄	152	0.49	0.48	0.31	0.20	A1:黄	
118		0.50	0.50	0.20	0.19	A1:黄	136	108	0.47	0.47	0.29	0.19	A1:黄	153	0.49	0.48	0.23	0.19	A1:灰	
119	104	0.49	0.49	0.23	0.16	A1:黄	137	109	0.47	0.45	0.19	0.20	A1:灰	154	0.48	0.47	0.28	0.20	A1:灰	
120		0.49	0.49	0.28	0.20	A1:黄	138	110	0.47	0.45	0.25	0.19	A1:灰	155	0.48	0.47	0.33	0.21	A1:灰	
121	107	0.48	0.47	0.28	0.18	A1:灰	139	111	0.46	0.46	0.31	0.19	A1:黄	156	0.48	0.48	0.23	0.18	A1:灰	
122		0.47	0.47	0.33	0.18	A1:灰	140	112	0.47	0.46	0.17	0.19	A1:黄	157	0.48	0.47	0.24	0.17	A1:黄	
123	108	0.41	0.40	0.28	0.17	A1:黄	141	113	0.46	0.45	0.26	0.21	A1:灰	158	0.47	0.46	0.22	0.19	A1:灰	
124		-	-	0.30	-	A1:黄	142	114	0.45	0.44	0.33	0.18	A1:黄	159	0.46	0.45	0.36	0.20	A1:黄	
125	109	0.47	0.47	0.28	0.15	B:灰白	143	115	0.44	0.45	0.48	0.20	A1:黄	160	0.42	0.41	0.22	0.20	A1:黄	
126		0.45	0.42	0.19	0.15	A1:黄	144	116	0.44	0.38	0.16	0.20	A1:黄	161	0.42	0.41	0.20	0.17	A1:灰	
127	104	0.43	0.43	0.28	0.18	A1:灰	145	117	0.48	0.47	0.24	0.18	A1:灰	162	0.41	0.41	0.20	0.17	A1:灰	
128		0.43	0.41	0.36	0.21	A1:灰	146	118	0.48	0.47	0.30	0.19	A1:黄	163	0.41	0.41	0.20	0.18	A1:黄	
129	110	0.42	0.41	0.33	0.20	A1:灰	147	119	0.47	0.47	0.37	0.19	A1:黄	164	0.42	0.41	0.15	0.18	A1:黄	
130		0.42	0.40	0.17	0.18	A1:灰	148	120	0.47	0.45	0.13	0.20	A1:黄	163 (100)	0.43	0.33	0.15	0.21	C:黄土	
131	111	0.40	0.39	0.22	0.17	A1:灰	149	121	0.47	0.46	0.26	0.19	A1:灰	164 (100)	0.47	0.46	0.27	0.19	C:黄土	
132		0.39	0.39	0.30	0.18	A1:灰														

※ 43: 1土坑 図11・P16, 243: 20土坑 図29・P43

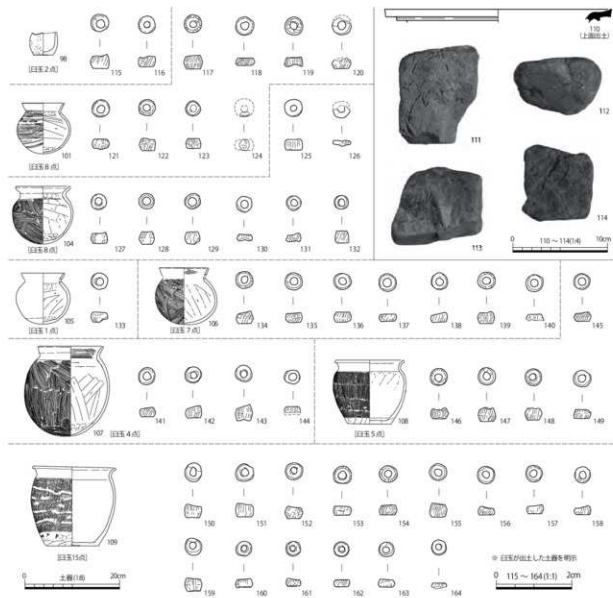


図 16. 4 土器溜まり 出土遺物 (2)

第3章 発掘調査の成果

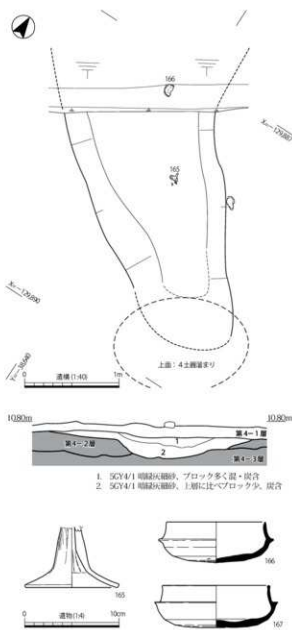


図 17. 5土坑 平面・断面・出土遺物

に当該期の居住域が展開することが推測される。下層から出土した遺物のうち須恵器の壺体部～底部(183)と大甕(184)は東側からの投げ込みと判断することができ、これについては後述す3流路の東に隣接する6溝や29溝が時期的にも関連することが推測される。

出土遺物の所見としては、上層出土遺物のうち須恵器の有蓋高杯3点(168～170)は、いずれも口径11cm、器高9cm前後、脚部の方形スカシは3方向で、器形や法量はほぼ一致している。その北側から出土した土師器の杯(171)と小型甕(172)のうち、小型甕(172)は口縁部が内湾する布留形で、外面タテ・ナナムハケ、内面ナデで仕上げられている。このほかには層位が明確でないものを含め、外面タタキ(もしくは貝殻腹縁痕)またはナデ・オサエ調整の製塩土器(173・177～179)を一定程度含む。下層の遺物には土師器の椀形高杯(180)や外反形甕(182)、須恵器の杯蓋(181)や中型壺(183)と大甕(184)があり、このうち中型壺(183)は口縁部が残存しないが、平行タタキののち体部外面にカキメを螺旋状に施し、内部のあて具痕は丁寧に消して仕上げている。大甕(184)は体部外面に平

には有機質層が堆積している。下層についてはラミナがみられる部分もあるが、堆積物は比較的均質であり、常時流水していた形跡は認められないことから流路は放棄化していた蓋然性が高く、洪水時に砂が供給されることで段階的に埋没が進んだと判断することができる。一方で上層は分級の良い土壌化した粘質土を主体とすることから、滞水状態で徐々に埋没していったようであり、洪水砂が供給された様子も窺えないことから、この段階には地形が安定化していた可能性が高い。なおこの3流路は、隣接する1期調査では検出されていないが、下層トレンチ西半で確認された落ち込みと対応し、さらに市教委H19年度A区・P区で確認された池状遺構(ASG II-1・PSG II-01・02)と同一の遺構とみなすことができる。その場合、南北の長さは80m以上に復元できる。

3流路から出土した遺物の量は多くはないが、完形の遺物が含まれる点で注目される。出土した遺物(168～184)のうち、(168～171)が第4-1層に対応する上層からの出土、(180～184)が第4-2層に対応する下層からの出土である。上層から出土した須恵器の有蓋高杯3点(168～170)や土師器の杯(170)と小型甕(171)は、出土した位置から西側からの投げ込みと判断することができる。市教委H19年度A区では、池状遺構ASG II-1の西側で古墳時代中期の方形の竪穴建物が2棟確認されており(ASI II-1・2)、3流路の西側

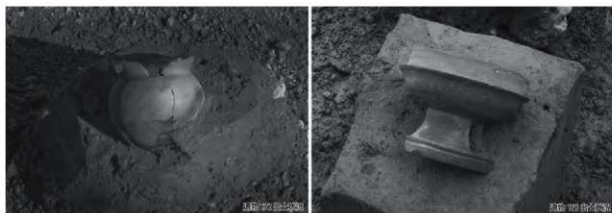


写真4.3 流路 遺物出土状況

行タタキを施し、タタキが口縁部にまで及んでいる点でやや珍しく、口縁部にはタタキのち回転ナデを施すが、タタキの痕跡は大部分で残っている。頸部の中ほどには区画とみられる一条の弱い凹線が施されていることから、タタキは装飾文様として意図的に残されたものと推測でき、定型化以前の初期須恵器とみなすことができるとともに、類似する事例が蓄積されれば生産地や時期を絞り込むことができるだろう。このほかに流路底部の砂礫層からは、磨滅した弥生土器（185）なども出土している。

出土遺物の年代観は、上層出土遺物がTK23～47型式頃に、下層がTK216～208型式頃にそれぞれ位置づけることができ、それと対応する第4-1層と第4-2層との整合性はとれている。3流路の埋土の堆積状況から周辺の地形と環境の変化を推測することが可能で、かつ層位ごとの出土遺物の時期が限定されることから、時期ごとに遺跡の環境変化を把握することができる点で重要である。

(2) 第4-2層 (図20～27)

第4-2層はオリーブ灰色の極細砂を主体としており、上層と土質はよく似ているが、細かなブロックがやや多い傾向がみられる。遺構・遺物のひろがり、堅穴建物や土坑、溝などが検出された調査区東端と、6溝・29溝が検出された調査区中央付近に集中しており、その間はやや低い凹地状の地形が復元できるが、ここでは遺物の出土も希薄である(図20)。調査区の西側には先に報告した3流路が位置しており、遺構・遺物がまとまる凹地までの範囲が微高地上に高まっているが、この範囲の基盤が砂礫からなる(4-3 a・b)が及ぶ範囲であり、下部に存在する古墳時代前期の河川の埋没作用によって形成された微高地とみなすことができる。調査区東端は最も標高が高く、基盤土(4-3 d)は粒径の細かい粘土や泥を主体としており、より安定した地形であったことがわかる。居住域を覆う上面の堆積層(4-2 b)は細かな土器片や炭化物をより含む傾向にあり、除去面では南側に隣接する1期調査も含めて堅穴建物が少なくとも6棟以上が確認されている。地形に起伏があることから層厚は0.1～0.25mまでやや幅があり、除去面の標高は東側微高地でT.P.+10.5m、中央東寄りの凹地でT.P.+10.3m、中央西寄りの微高地の最も高い地点でT.P.+10.6mである。

第4-2層から出土した遺物のうち、図化した(186～190)はいずれも6溝・29溝周辺の中央微高地付近からの出土で、6溝・29溝とも関連が深いことが推測できる。須恵器の杯類(186・187)や甕(188)はTK208型式頃に位置づけることができ、土師器の布留形甕(189)や口縁部が外反する球胴形の甕(190)の年代観とも大きな矛盾はなく、上層の第4-1層と関連遺構からの出土遺物よりも時間的に僅かに先行するため、層位的な矛盾はない。

第3章 発掘調査の成果

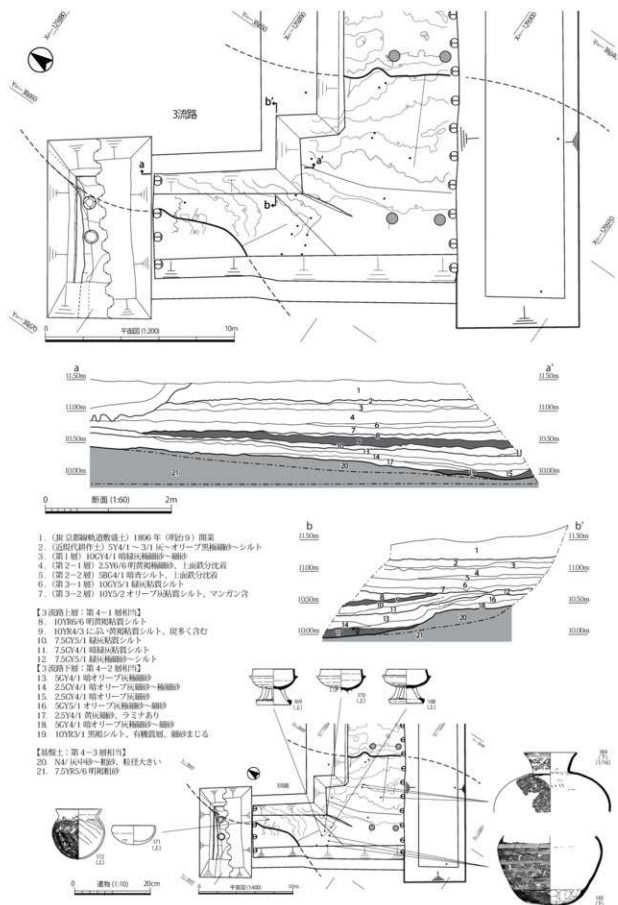


図 18. 3 流路 平面・断面・遺物出土位置

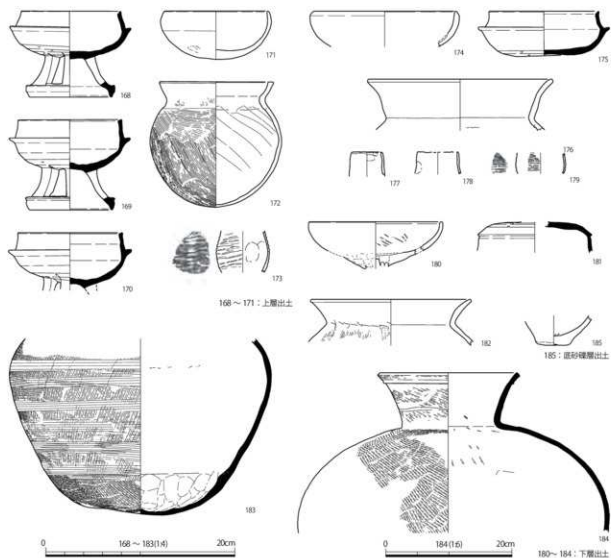


図 19. 3 流路 出土遺物

6溝・29溝 (図 21・22・23) 調査区の中央微高地上に位置し、調査区に直交する北西—南東方向に2条の溝が併行しており、東側の29溝は隣接する1期調査の29溝に対応する。西側の6溝は幅1.0m前後、深さ0.12mで浅く、埋土は青灰～暗緑灰の中砂または極細砂を主体とし、ブロックや基盤土(4-3d)に由来する礫を含む。上面に第4-2層が及んでいないことから、时期的にやや新しい可能性も想定できる。埋土からの出土遺物は東の29溝に比べて少なく、口縁部が外反する外面ハケの土師器甕(193)がおおよそ全形を復元できる。このほかは細片が多く、土師器高杯の杯底部(191)や須恵器の器台の脚部の可能性がある(192)などが出土している。

29溝は6溝の東5mに位置し、東西が緩やかな傾斜で徐々に下がっていき中央部分の幅1.3～1.8mが溝状に深く落ち込む。この29溝については、上半とした埋土(2～4)までが第4-2層に関連するが、(4-3d)に相当する基盤土(5)の下部にもほぼ同じ位置で溝状の落込みが存在しており、これについては29溝の下半(6)とした。上半部分の深さについては0.33mで、埋土には中～粗砂が混じることから、一定程度の流水もしくは流れ込みがあったことを示している。

出土遺物のうち須恵器の杯身(194)と高杯脚部(196)が南側の上面付近からの出土で、ほかは主に埋土(2・3)から出土している。須恵器の杯類(197・198)と土師器の椀形高杯(200・201)

第3章 発掘調査の成果

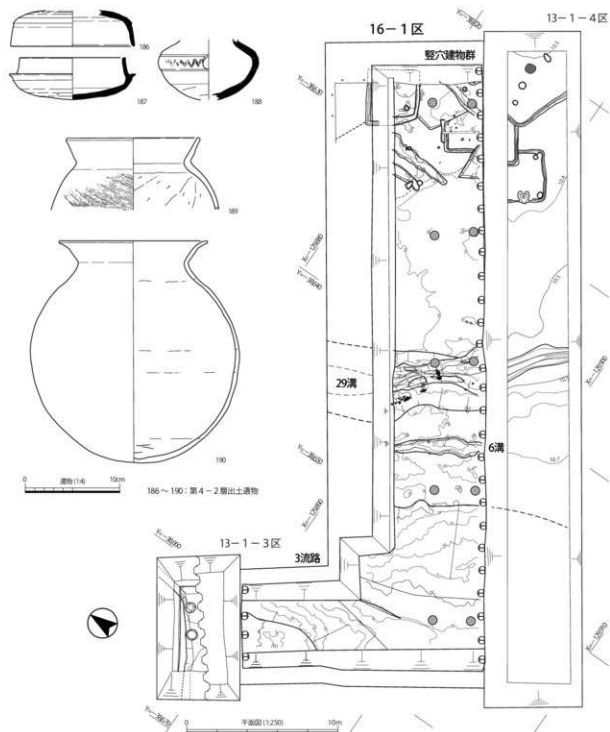
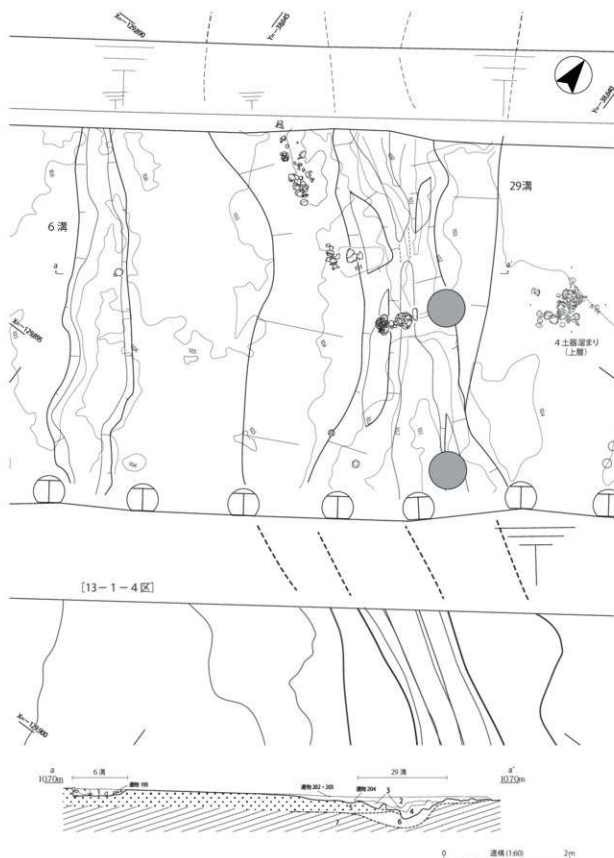


図20. 第4-2層除去面 全体平面図・出土遺物

が西側肩部北側から出土し、南東には須恵器の有蓋高杯(202)と土師器の大型有段高杯2点(203)、土師器甕2点(205・206)と棒状の石材(207)がそれぞれまとまって出土している。いずれも完形近くまで復元でき、投棄時の状態を留めているとみやすい。

出土遺物の所見を述べる、西側肩部北側で出土した須恵器杯類(197・198)は、口径12cm前後で直立気味に立ち上がる。これとともに出土した土師器の椀形高杯(199・200)は層位的に新しい4土器溜まり出土の(図15:102)に比べて大ぶりで古い様相を示す。その南からまとまって出土した3点の高杯のうち、須恵器の有蓋高杯(202)は下半部が土釜形に膨らむ古相の形態で、吹田操車場遺



1. (6溝埋土) 7.5GY 暗緑灰緑粘砂、礫・ブロック状、遺物あり
2. (29溝埋土上下) 10YS/2 灰青シルト、灰青、遺物多い
3. (29溝埋土上下) 2.5GY/1 暗オリーブ灰緑粘砂、粘砂混、遺物あり
4. (29溝埋土上下) 2.5GY/1 オリーブ灰粘砂、遺物なし
5. (4-3b段) 緑褐色の沖積積り、5YR5/8 甲赤粘砂混・礫（浮腫土塊）、土面硬化
6. (29埋土上下) 2.5Y/1 暗オリーブ灰粘砂、遺物あり
7. (5-1a) 古積土層(河川相積) 7.5YR5/1 褐色鉄質粘砂

図 21. 6溝、29溝 平面・断面

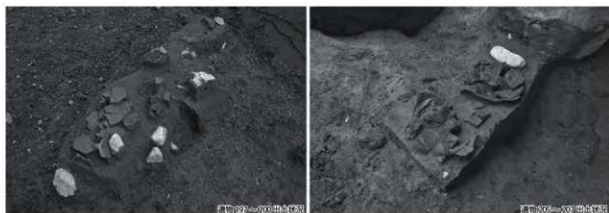


写真5. 29溝 遺物出土状況

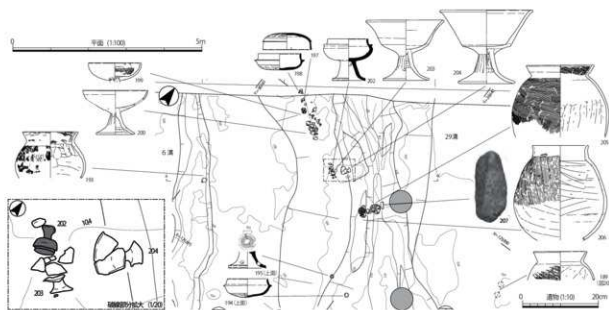


図22. 6溝、29溝 遺物出土状況

跡から類似品が出土していることから、千里塚産の可能性が推測できる。土師器の大型有段高杯(203・204)は2点の大きさに違いがあり、接合方法や内面のケズリの有無など細部の調整も異なることから、製作系統が異なる。南に位置する土師器甕は、東側の(205)が布留形であるのに対して、西側の(206)は口縁部が直立気味に立ち上がって体部下半に膨らみがあるやや特異な形状を呈する。内外面の調整は布留式の製作技術の影響を受けているが、ハケが粗く器壁が分厚いづくりで、形態的にも布留形や韓式系の長胴甕とは明らかに系譜が異なる。これらの甕とともに出土した棒状の石材(207)は、出土状況から上記の甕2点と関連が深いことが明白であり、甕の支柱の可能性も推測できる。

29溝から出土した遺物の年代観は、須恵器はTK216型式頃に、土師器は椀形高杯や大型有段高杯などの形態から併行する辻編年3段階頃にそれぞれ位置づけることができる。上面出土の須恵器(194・195)は埋土中から出土した遺物よりもやや時期が下のTK208型式に位置づけることができ、層的な前後関係ともうまく符合する。また、6溝から出土した遺物については、詳細な時期を限定することが難しいが、29溝と前後する時期とみて大きな誤りはない。

上層(第4-1層)と同様に付近ではまとまった遺物が出土するが、居住関連遺構はなく、遺物の状況は集落縁辺部における祭祀行為の一端を示すものとみてよい。その中でもまとまって投棄された3点

第3節 第4層関連の遺構と遺物

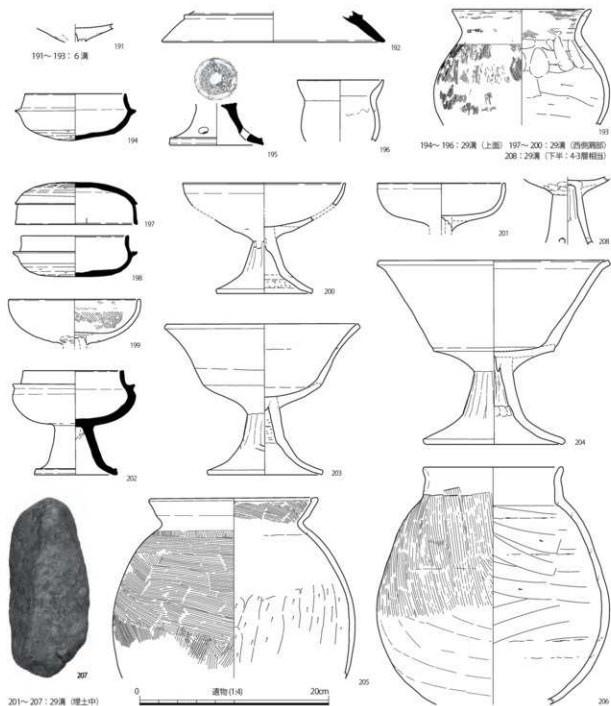
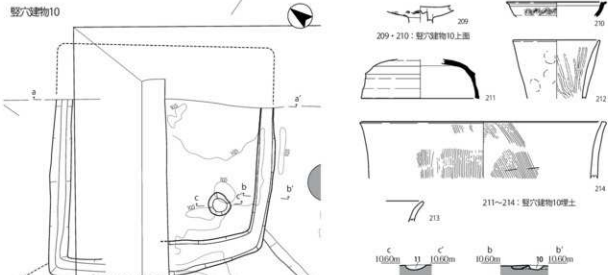


図 23. 6溝、29溝 出土遺物

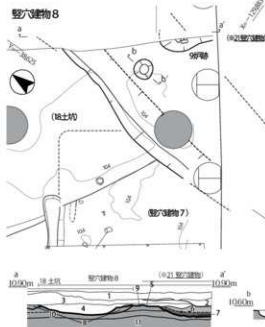
の高杯(202~204)や2点の甕と甕の支柱(205~207)は、いずれも同一器種でありながら製作者が異なる点が強調でき、祭祀行為の具体的なあり方を考える上でも重要である。

竪穴建物群(図 24) 居住関連の遺構は調査区東端から8mの範囲で検出されており、その範囲は粘質土(4-3d)が基盤土として拡がる範囲と一致し、西側の凹地に比べて標高は0.1~0.2mほど高い。ここでは竪穴建物としてほぼ確実な遺構が3棟(竪穴建物7・8・10)検出されており、このほかに竪穴建物の可能性が残るややいびつな形状の土坑2基(13・18土坑)と、溝や柱穴などが確認されている。南側に隣接する1期調査でも竪穴建物が3棟以上検出されており(21・22・23竪穴建物)、これらの遺構と重複して土坑が下部にも存在している。竪穴建物のうち21竪穴建物が一辺5m以上の

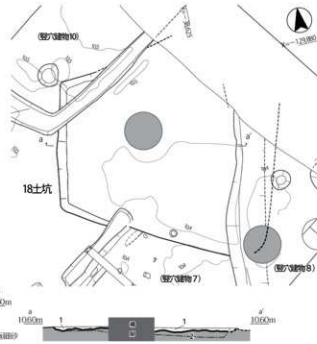
第3節 第4層関連の遺構と遺物



1. (第4-1層) 10G5/1 緑灰シルト
2. (第4-2層) 5G84/1 青灰粘質シルト
3. (第4-2層) 5G84/1 青灰粘質シルト、ブロック葺、炭灰
4. (竪穴建物10埋土) 7.5V4/1 灰粘質シルト、炭灰
5. (竪穴建物10遺構埋土) 5V4/1 灰シルト
6. (18土埋土) 7.5V4/1 灰粘質シルト
7. (第4-3層) 5V84/3に赤い黄緑粘質シルト、ブロック葺、炭灰
8. (第4-3層) 7.5V6/1～5/1 灰粘質シルト、炭灰
9. (第5層) 2.5G5/1 オリーブ灰粘質シルト、硬質じり
10. (竪穴建物8埋土) 7.5V4/1 灰粘質シルト、炭灰
11. (竪穴建物8柱穴埋土) 5V5/1 灰シルト



1. (第4-1層) 10G5/1 緑灰シルト
2. (※21 竪穴建物土か) 7.5V4/1 灰シルト、炭灰
3. (第4-2層) 5G84/1 青灰粘質シルト
4. (竪穴建物8埋土) 2.5G4/1 オリーブ灰粘質シルト
5. (竪穴建物10埋土) 7.5V4/2 灰粘質シルト
6. (18土埋土) 10V84/2 灰黄緑粘質シルト (※黄土層)
7. (9号埋土) 7.5V84/6 粘シルト、磁土炭粘質、土銅黄皮片 (※純粘質)
8. (18土埋土) 7.5V4/1 灰粘質シルト
9. (第4-3層) 5V84/3に赤い黄緑粘質シルト、ブロック葺、炭灰
10. (第4-3層) 7.5V6/1～5/1 灰粘質シルト、炭灰
11. (第5層) 2.5G5/1 オリーブ灰粘質シルト、硬質じり



1. (18土埋土) 5V4/2 灰オリーブシルト
2. (第4-3層) 5V4/1 灰オリーブ粘質砂



図25. 竪穴建物10・8、18土坑 平面・断面・出土遺物

第3章 発掘調査の成果

7の順に古くなる。1期調査22・23 竪穴建物と今回の調査で検出された13土坑・竪穴建物7との先後関係は明確でないが、22 竪穴建物の北側肩部が今回の調査区に及んでいないことから、22・23 竪穴建物が先行する蓋然性が高い。以上をまとめると(表3)の通りに変遷順を整理することができる。

竪穴建物10(図25) 調査区の北東端で検出した方形の竪穴建物で、東側と北側が立会範囲に及んでいる。このうち北側については慎重な重機掘削により遺構を検出することができ、東側は十分な調査ができなかったが、法面の掘削時に東側の立ち上がりを目視で確認して簡易な計測をおこなったため、遺構の全容を概ね把握することができた。このように北側・東側の立会範囲があくまで簡易な略率的な図化によるため、規模・形状についてやや正確性が欠けるが、一辺3.5m程度の規模に復元できる。検出面からの深さは0.08mで、埋土は灰色粘質シルトを主体とし、炭化物を含む。壁溝は幅0.3～0.4m、深さは0.10mである。建物の南西隅付近で径0.3mの柱穴を1基確認したが、深さは0.07mで浅くやや不明確で、北西側では柱穴が確認されていないことから、この竪穴建物に伴わない可能性もある。

埋土からの出土遺物には土師器と須恵器があり、出土量は少なく細片が多い。上面出土の遺物として土師器高杯の接合部(209)や麁の可能性(210)などがあり、埋土中からの出土遺物には須恵器杯蓋(211)のほか、土師器の直口壺(212)、外反形甕の口縁部(213)、甕(214)などがある。このうち須恵器杯蓋(211)はTK208型式頃に位置づけることができ、竪穴建物10が居住域の遺構としては最も新しい遺構であることから、居住域の下限を考える手がかりとなるため重要である。

竪穴建物8(図25) 調査区の南東隅で検出されたが、極めて部分的な範囲に留まったため、正確な規模や形状は明確ではない。調査時には隣接する1期調査21 竪穴建物と同一の遺構と認識していたが、そのように考えた場合には2基の炉跡が伴うことがやや不自然であり、詳細な位置関係を検討したところ、別遺構であると判断した。21 竪穴建物については調査区の東壁南端の断面で(2)とした落込みが東側肩部にあたと推測でき、竪穴建物8がこれに先行することが把握できた。また、竪穴建物8に西側には18土坑が重複しており、竪穴建物8が先行する。

建物の埋土は灰オリーブ粘質シルトを主体とし、検出面からの深さは0.04mである。壁溝は幅0.6m、深さ0.10mで、隣接して検出された柱穴は径0.3m、深さは0.96mである。南東隅で検出された9炉跡は残存する南北長が0.9mで、埋土は黄灰褐～褐色の焼土層である。底には炭層が堆積し、土師器甕の破片がまとまって出土したが、磨滅が著しい体部片が中心であり、図化することができなかった。このほかに埋土中からは土師器が少量出土しているが、いずれも細片である。大型高杯の杯底部(215)と布留形甕の口縁部(216)などがあり、詳細な時期比定は難しいが辻編年3段階～4段階の範疇におさまる遺物とみなすことができる。

竪穴建物7(図26) 東側で竪穴建物8と、北側で18土坑と、南側で13土坑とそれぞれ重複しており、これらの遺構よりも古い。また、南側に隣接する1期調査22 竪穴建物との先後関係については、先に述べた通りこの竪穴建物7の方が新しいと判断できる。竪穴建物の北西辺と南西辺、および竪穴建物8の下部で北東辺の一部を確認できたことから、全体の形状をおおよそ把握でき、南北の長さは3.2mをはかる。検出面からの深さは0.08mで、周囲の壁溝は幅0.3m、深さ0.11mである。主柱穴は検出されおらず、元から存在しなかった可能性が高い。

埋土のうち特に上層(1)は基盤土(4-3d)と酷似していたため、検出面での輪郭が不明確であったが、炭化物等の拡がりを手掛かりに全容を把握することができた。埋土上層(1)を除去すると、北西側で赤褐色の被熱層の拡がり(2)が確認でき、その直上面では薄い炭層の拡がりもみられた。そ

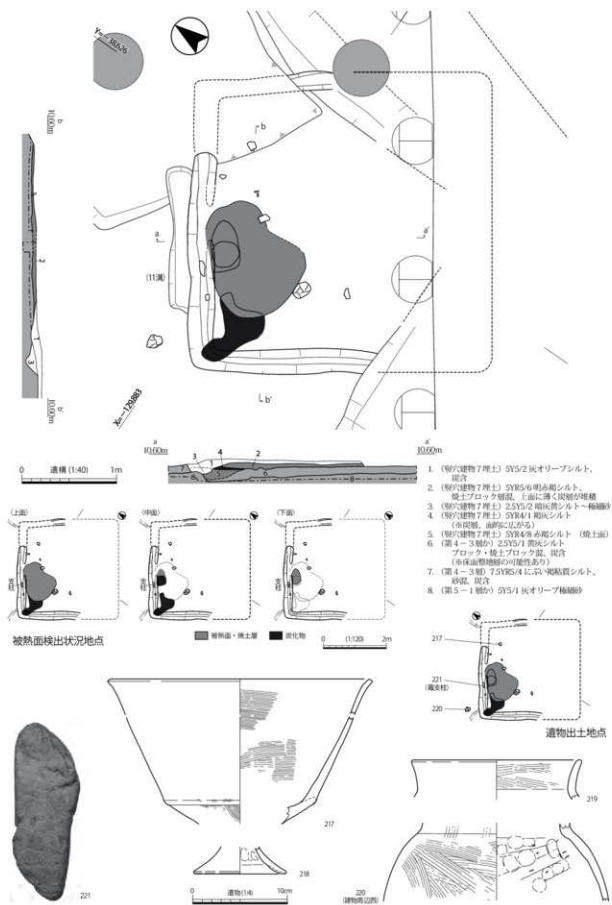


図26. 竪穴建物7 平面・断面・検出状況・出土遺物

第3章 発掘調査の成果

の被熱層を除去すると、下部では北西辺と西側隅の一部で炭化物の拡がり（3）が検出され、さらに北西辺の炭化物の下部にも被熱面が存在しているのが確認された。この部分では壁溝が不明確になっており、一連の被熱痕跡は造り付け竈が潰れた痕跡とみなすことができ、周辺の壁溝からは支脚とみられる棒状の石材（221）も出土している。その一方で、周辺から竈の羽口などの鍛冶関連遺物の出土遺物（図13：85・86、図14：97、図28：229など）が確認されていたため、調査時には鍛冶工房の可能性も想定して調査を進め、被熱層や焼土層を中心に土壌を洗浄して鍛造剥片等の微細な遺物の有無を確認したが、関連する遺物等は確認されなかった。隣接する1期調査でも造り付け竈が検出されており（21 竪穴建物）、被熱痕跡は造り付け竈の痕跡とみてほぼ誤りはないと判断できる。

なお、北西辺に隣接する位置で11溝を検出したが、これについては竪穴建物7の全容を把握する前に検出された遺構で、炭層や焼土層が溝状に薄く拡がっていた。位置的には竪穴建物7の造り付け竈の縁辺であり、竈の削平に由来するような層の拡がり認識することができる。

埋土からの出土遺物には土師器と須恵器があり、いずれも細片であるが、一部に図化可能なものも含まれる。このうち建物跡床面直上から出土した土師器の大型有段高杯（217）は、杯部が極端に深く大型化しており、辻編年3段階～4段階頃に位置づけることができる。土師器甕のうち口縁部の破片（219）は関連する11溝から、大部の破片（220）は竪穴建物7の周囲からの出土で、同一個体であるかはわからないが出土地点は近い。口縁部が直立気味にのび、体部のハケが粗く器壁が厚いことから、29溝出土の甕（図23：26）のような形態に復元できる可能性が高い。出土物からは僅かに竪穴建物10に先行するとみてもよく、重複する遺構の先後関係とも大きな矛盾はない。

18 土坑（図25） 竪穴建物10の南側と、竪穴建物8の西側にそれぞれ重複し、ふたつの建物よりも古い。また南側は竪穴建物7と重複しており、18土坑の方が新しい。台形状の平面形を呈し、規模は南北3.3m以上、東西約3.5mをはかる。調査時には竪穴建物の可能性も想定したが、いびつな形状であり、明確な壁溝も認められないことから、竪穴建物である可能性は低いと判断した。検出面からの深さは0.07mで、埋土は灰オリブシルトを主体とする。埋土からの出土遺物は、細片で図化可能なものはないが、いずれも古墳時代中期の土師器であり、周辺の遺構と大きな時期差はない。

13 土坑（図27） 竪穴建物7の南西側と重複し、竪穴建物7よりも新しい。南側に隣接する1期調査22・23竪穴建物との先後関係は明確でないが、22竪穴建物の北側肩部が検出されていないため、13土坑が新しいと判断できる。部分的な検出に留まったため全体の形状や規模は不明であるが、長さは2.5m以上になる。深さは0.13mで、埋土は灰細細砂を主体とし、炭化物を含む。埋土からの出土遺物には土師器のほか須恵器の甕片があるが、細片で図化可能なものはない。詳細な時期比定は難しいが、ほかの遺構と同様に古墳時代中期の遺構とみなすことができる。

14 溝・16 溝（図27） 居住域の西側を南北方向に走る2条の溝である。このうち東側の14溝は、北側断面から竪穴建物10に先行することが判明している。東側の14溝が南北の検出長4.7m、幅0.8mで、西側の16溝が南北の検出長2.3m、幅0.7mである。北側の立会範囲では延長部分を十分に把握することができなかったが、東側の14溝については竪穴建物10の北西隅付近で屈曲して、北西方向に向かってのびる可能性が推測できる（図24）。埋土はいずれもオリブ灰シルトを主体とし、炭化物を含む。深さは14溝が0.09m、16溝が0.10mである。

14溝埋土からは土師器と須恵器が、16溝埋土からは土師器がそれぞれ出土しているが、いずれも細片で出土量が少ない。14溝の北寄り東側肩部で内面ナデ消しの須恵器甕の体部片（222）が出土して

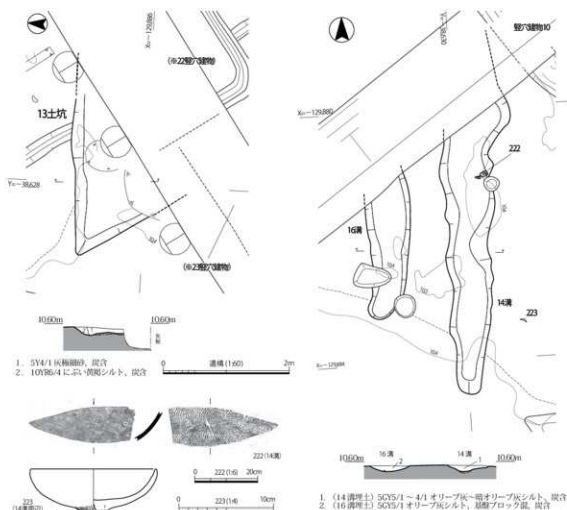


図27. 13土坑、14・16溝 平面・断面・出土遺物

おり、16溝からは図化できなかったが布留形甕の細片がある。このほかに14溝の周辺東側から椀形高杯の杯部(223)が出土しており、杯部はやや大ぶりである。詳細な時期比定は難しいが、14溝の須恵器はTK216型式～TK208型式頃に、周辺部の土師器は辻編年3段階頃にそれぞれ位置づけることができ、先行する竪穴建物10よりも遺物の様相は僅かに古相を示すといえる。

(3) 第4～3層 (図28～31)

第4～2層より上部では水平に近い堆積であるのに対し、第4～3層除去面では地形が起伏に富んでおり、上面で居住域が確認された調査区東端と出土遺物が集中する中央西寄りが高微地上に高く、このふたつの高まりに挟まれた凹地と3流路が位置する西側が落ち込む地形が復元できる。後述するように東西のふたつの微高地の下には、それぞれ古墳時代初頭以前(第6層)と古墳時代前期(5-1a)の自然流路が存在しており、このふたつの流路の埋没作用によって微高地上の高まりが形成されたと考えることができ、その間の凹地は後背低地とみなすことができる。

このうち東側の微高地上では土坑や柱穴が検出されており、微高地と落ち込みの境には北西～南東方向に溝が1条のびる。東側微高地には居住域であった可能性が高く、中央の高まりも含めて西側では遺構・遺物が少なくなるため、居住域を区画する溝の可能性が高い。ただし、東側の微高地上で検出された遺構の密度は上面と比べると明らかに低く、第4～3層中からの出土遺物も少ない。西側の微高地に

第3章 発掘調査の成果

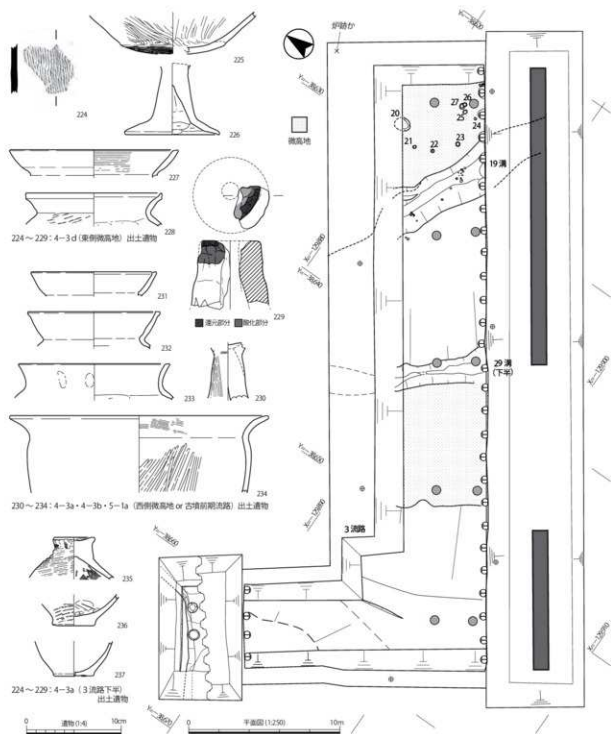


図 28. 第4-3層除去面 全体平面図・出土遺物

については、上層ではこれまでも述べたようにまとまって遺物が出土し、集落縁辺部での祭祀行為を示すような遺物の出土状況がみられたが、第4-3層除去面では遺構・遺物が少なく、微高地の東側肩部に29溝（下半）が存在する程度である。

なお、上層は比較的均質な堆積であるが、第4-3層については地点によって層相が大きく異なっており、形成時期が異なる可能性も想定される。落込み部分に堆積する（4-3c）は極細砂～シルトを主体とする氾濫堆積物とみなすことができ、遺物はほとんど出土していないが、断面から東端（4-d）や中央西寄りの（4-3a・b）よりも新しい堆積と判断することができる。調査区東端の居住域

下部(4-d)は、粘質シルトを主体とする人為的な堆積で、上半は赤みがかった色調を呈する。古墳時代前期の布留形甕(227)や古墳時代初頭以前の甕(228)も含むが、須恵器甕(224)や辻編年2段階新相～3段階頃の土師器高杯(225・226)などがある。時間的には第4～2層の直前段階のものとみなすことができるが、時期差はあまりない。さらにここからは輪の羽口の先端部(229)が1点出土しているが、上層出土の畿治関連遺物とは器質が異なることから、時期差を示す可能性がある。中央西寄り微高地上面に広がる(4-3a・b)は、富田台地の段丘構成層の2次堆積の可能性がある砂礫層で、主に古墳時代前期(布留1～2式頃)の甕や大型鉢(230～234)が出土している。除去面で確認された29溝(下半)の出土遺物(図23:208)もほぼ同時期の所産とみてよい。下部の(5-1a)との掘り分けが十分ではなく、かつ磨滅した個体も多いため、層の形成時期を限定することは難しいが、前期後半頃の形成とみるのが穏当である。また、(4-3a・b)のうち西側の3流路の下部には主に弥生後期の土器(235～237)が含まれるが、いずれも磨滅しており、これについては(4-3a・b)の堆積時期を直接示すものではない。

西側微高地上の(4-3a・b)は層厚が0.2～0.3mで除去面の標高がT.P.+10.45m、中央凹地上の(4-3c)は最も厚い地点で層厚が0.35mで除去面の標高が最も低い19溝の西側肩部付近でT.P.+10.2m、東側微高地上の(4-d)は層厚が0.15～0.25mで除去面の標高がT.P.+10.35mである

20土坑(図29) 東側居住域で検出され、北半は側溝によって削平を受けている。そのため正確な規模や形状は不明であるが、径0.9m、深さ0.15mの小規模な土坑である。埋土は褐灰シルトを主体とし、製塩土器の細片を多く含んでいた。製塩土器が含まれていることを確認した段階から、埋土を回収して洗浄したところ、回収できた範囲での重量は119.1gにのぼり、周辺や側溝中からも製塩土器は出土していることから、本来的な出土量はやや増えるとみてよい。

出土遺物については、上面からは須恵器の杯蓋(238)が出土しており、周辺の第4～3層中から出土した杯身(239)とはセット関係にある。丁寧なつくりでTK216型式頃に位置づけることが可能で、遺構の直接的な時期を示すものではないが、遺構の下限を知る手がかりになる。このほかに埋土からは土師器の細片と滑石製白玉1点(243)が出土しているが、図化可能なものは限られる。製塩土器(240～242)については特に細かい破片が多く、外面タタキの破片(241・242)も一部で確認できる。

19溝(図30・31) 微高地と落込みの境で検出された北西～南東方向の溝で、幅は2.5m前後、東側微高地と西側との比高がそれぞれ0.48m、0.26mである。埋土は上面に色調がやや淡い灰色の粘質シルトが堆積し(49)、下半には土壌化した暗褐色の粘質シルトが堆積しているため(50)、滞水状態で徐々に埋没が進行したことがわかる。

北側立会い範囲については、東側の肩部の位置を目視で確認し、北西

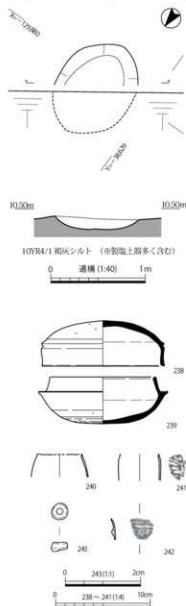


図29. 20土坑 平面・断面・出土遺物

第3章 発掘調査の成果

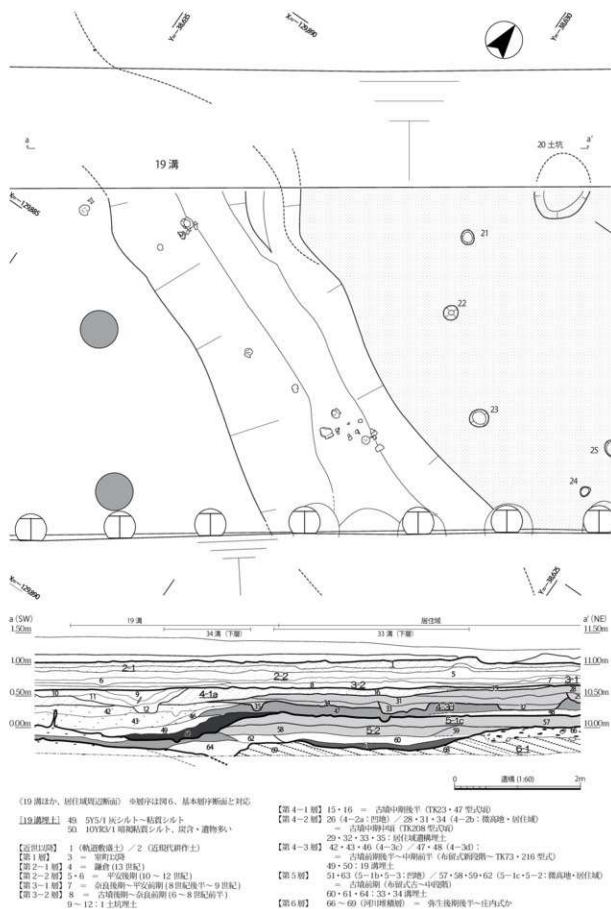


図30. 19溝 平面・断面

第3節 第4層関連の遺構と遺物

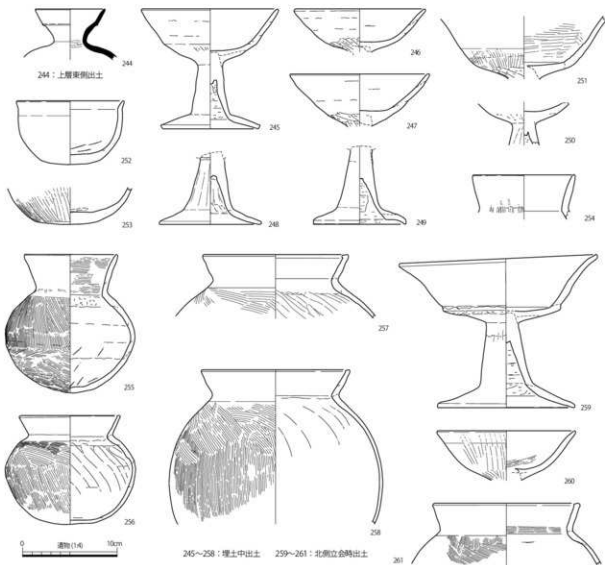
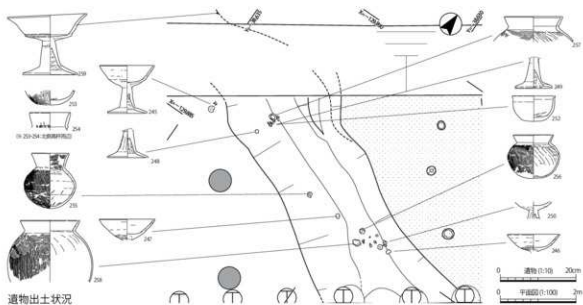


図 31. 19 溝 遺物出土位置・出土遺物



写真6. 19溝 遺物出土状況

方向からまっすぐ溝のびてくることを把握して、遺物の回収もおこなっている。南側については、1期調査では下層の調査をおこなっていないが、下層確認の東半トレンチ第5層（2～5：第250集第26図）と対応すると判断でき、溝はそのまま南東方向にのびることがわかる。東側の微高地には土坑や柱穴が確認されているため居住域とみなすことができ、溝を挟んで西側は一段低い湿地状の落込みであることから、居住域を区画する溝の可能性が高いと判断できる。

埋土中の下半と底面付近を中心にしてまとまった遺物の出土があり、東側の居住域または西側の意図的な投げ込みによるものとみられる。完形品も含まれることから、投棄時の状態を良好に留めているとみられ、資料の一括性は高いと判断される。出土遺物のほとんどは土師器であるが、上層東側肩部付近から須恵器の小型壺（脇か）の口縁部（244）が1点出土しており、これについてはON231～TK73型式頃に位置づけられる特に古い時期の須恵器で、埋土の埋没時期の下限を判断する手がかりになる。埋土下半の土師器は調査区の北寄りと南寄りに出土地点がまとまり、高杯の出土量が若干の差がみられるが、器種ごとに大きな偏りはみられない。供膳具のうち高杯は有稜形（245）と稜が散化した直口形（246・247・250）があり、大型有段形（251）も含まれる。いずれも杯底部にケズリを施す点特徴的であり、類例は少ないが安威遺跡出土資料に類例がある²⁷。このほかの供膳具のうち鉢とした（252・253）は、小型品と中型品が1点ずつあり、全形が復元できる（252）はやや深手の器形で、類例はあまり知られていないが、中期前半以降に増加する杯・椀などとの関連が推測できる。直口壺（255）は外面にハケが残る点がやや珍しく、下半部と上半部の外面のハケの方向が異なる。この境には接合痕もみられ、下半を半乾燥させたのち上半部の整形をおこなっていることが把握でき、製作工程がよくわかる。小型甕（256）は体部が偏球気味のやや珍しい器形で、これについても外面のハケや接合痕から製作工程がよくわかる資料である。布留形甕（257・258）はいずれも外面タテ・ナナメハケで、小型甕（256）も含めて内面はいずれもナデ調整である。また小型甕（256）と布留形甕（258）には外面にススが顕著に付着している。（259～261）については北側立会時に回収したもので、このうち出土地点が明確な大型有段高杯（259）は、杯部がまだ浅く古相を示し、有稜形と同様に杯底部にケズリを施す。

出土した土師器の年代観については、おおそ辻編年2段階新相頃とみられるが、甕の外面のハケの方向や内面のケズリの省略など新しい要素をふまえると辻編年3段階まで下る可能性もある。器形や細部の調整などに在地的な要素がやや強いため詳細な年代比定がやや難しいが、肩部から出土した須恵器の壺（244）から下限はON231～TK73型式頃であり、上層の堅穴建物群とはやや時期差がある。資料の一括性が比較的高く、上層には須恵器も伴うことから、この地域の古墳時代前期後半～中期初頭の土器様相を把握する上で良好な資料といえる。

（4） 小結

以上のように第4層では古墳時代中期の遺構・遺物がまとまって確認され、集落の居住域と縁辺部の一端が明らかとなった。第4層は大きく3時期に区別でき、出土遺物から第4～1層が中期後半（5世

紀後半：TK208～23 型式)に、第4-2層が中期中頃(5世紀前半～中頃：TK216～208 型式)に、第4-3層が前期後半～中期前半(4世紀後半～5世紀前半：布留式新段階～TK216 型式)にそれぞれ帰属する。調査区の東端と中央西寄りに微高地があり、古墳時代中期を通して起伏のある地形が徐々に平坦化していく過程が把握できたが、東側の微高地には居住域が展開し、西側の微高地では遺構が少ないが遺物がままとって出土している。こうした様相は、古墳時代中期を通して継続するが、特に東側の微高地では第4-2層除去面で密集して竪穴建物が検出されており、この時期にひとつのピークがあったことがわかる。さらに4土器溜まりをはじめとする西側微高地における遺物の出土状況は、居住域の縁辺部における祭祀行為の具体像を示す良好な資料となるだろう。

出土遺物には土師器や須恵器など土器類を中心にまとまった量があり、の中には平底鉢や甕などをはじめとする韓式系土器や製塩土器、鍛冶関連遺物、滑石製玉類などが一定量含まれる点は、遺跡の性格を考える上で重要である。また、摂津では大阪府内でも河内など南部の地域に比べると一括性の高い当該期の資料が少ないが、今回の調査では完形に近い遺物が多く出土し、なおかつ層位的にも前後関係を把握することができることから、土師器・須恵器の地域的な様相や変遷過程を考える上でも資料の重要性は高いといえる。

第4節 第5層関連の遺構と遺物 (古墳時代前期)

古墳時代前期の堆積層を第5層として一括したが、層相は調査区の西半と中央東寄り、東端で層相はそれぞれ大きく異なる。調査区西半には北西-南北方向の自然流路が存在していることが確認できたが、底面は掘削限界のT.P.+9.85 mよりも深いことから全容を把握するに至っていない。この自然流路の河川堆積層(5-1 a)が調査区の西側およそ3分の2の範囲に堆積しており、埋没作用によって上面に微高地が形成されている。その一方で東端については、オリブ灰の粘質シルトを主体とする堆積層(5-1 c・5-2)で、ブロックなどが含まれることから人為的堆積層の可能性がある。下部には弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃とみられるより古い時期の河川堆積層(第6-1層)が確認されており、この流路の埋没作用によって形成された微高地上に(5-1 c・5-2)は堆積し、この上面に居住域が展開するものとみられる。中央東半のうち上層の中砂からなる(5-1 b)は、断面から第5層の中では最も新しい堆積で、東西の微高地の間の凹地を埋める洪水堆積層と判断できる。一方で下半の(5-3)については、直上層(5-1 b)や西側の河川堆積層(5-1 a)に比べると粒径は細かく暗い色調で、西側の河川堆積層(5-1 a)や東側微高地を形成する粘質シルト層(5-1 c・5-2)よりも形成時期が古い。東側の粘質シルト層(5-1 c・5-2)と西側河川堆積層(5-1 a)の前後関係が明確でないが、以上をまとめると(5-3)→[(5-2)→(5-1 c)または(5-1 a)]→(5-1 b)の順で堆積したと判断することができる。このうち掘削限界にまで及んでいない微高地を含めた調査区の東側を中心に第5-1層と第5-2・3層の除去面で遺構検出をおこなっており、第5-1層除去面で柱穴4基を、第5-2・3層除去面で北西-南東方向の溝2条(33・34溝)をそれぞれ検出している。

(1) 第5-1層 (図32・33)

第5-1層除去面では、東微高地上で柱穴を4基検出した。いずれも径0.3m、深さ0.15～0.3mに

第3章 発掘調査の成果

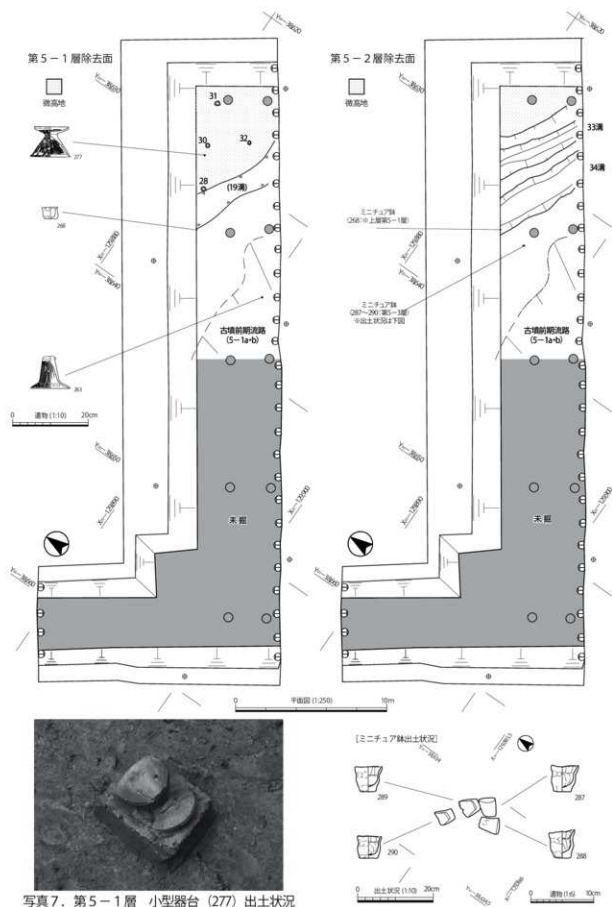


写真7. 第5-1層 小型器台 (277) 出土状況

図32. 第5-1層・第5-2層除去面 全体平面図・遺物出土状況

第4節 第5層関連の遺構と遺物

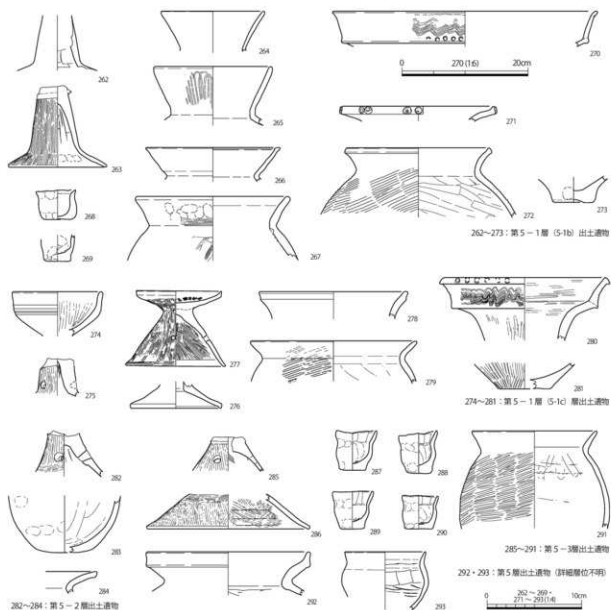
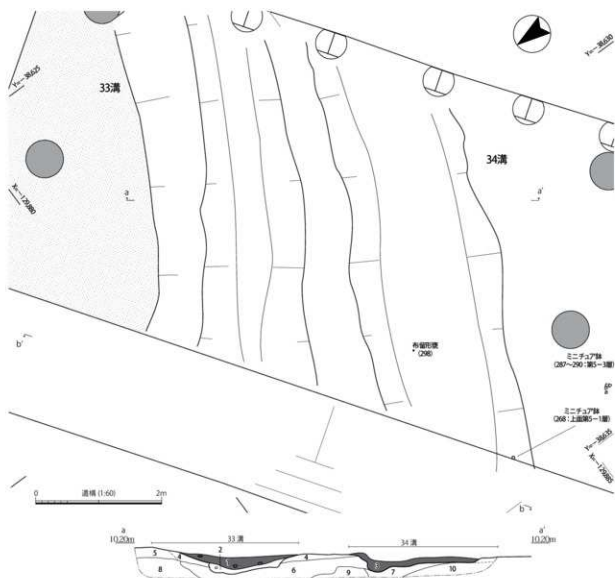


図33. 第5層 出土遺物

取まり、散在しており建物を構成しない。このことから東側に居住域が展開することが推測されるが、遺構密度は上面に比べると低い。東側微高地での第5-1層除去面の標高地はT.P.+10.2m前後で、上層からの掘乱(19溝)を挟んだ西側の凹地とは0.1~0.15m程度の比高がある。

出土遺物のうち、調査区西側の河川堆積層(5-1a)からの出土遺物については、上面の砂礫層(4-3a・b)と併せて掘削しており、これについては先にも報告したように古墳時代前期の布留1式~2式頃を中心とする(図28:231~234)。その東の凹地部分(5-1b)からの出土遺物(262~273)には、土師器(262~269)と弥生土器(270~273)がある。このうち布留形甕(266)は口縁部上端が拡張して面をもっており、おおよそ布留1式後半頃に位置づけられ、そのほかの土師器もほぼ同時期の所産とみてよい。東側微高地部分(5-1c)からの出土遺物についても凹地部分の様相と大きな違いはなく、土師器(274~278)には高杯(275・276)や小型器台(277)などの精製器種が含まれる。特に小型器台(277)はほぼ完形の状態而出土しており(写真5)、最終的な内外面の仕上げはハケでなされている。詳細な時期を限定することは難しいが、布留1式後半以前の所産である。

第3章 発掘調査の成果



1. (C33遺埋土) 7.5Y4/1～3/1灰～オリーブ黒細砂、礫混・状況
2. (C33遺埋土) N4/灰黒土→10CY6/1緑灰細砂
3. (C34遺埋土) 5Y4/1灰黒粘シルト
4. (第6層) 河川堆積層) 10Y6/2オリーブ灰シルト
5. (第6層) 河川堆積層) 10Y5/1～6/1灰～オリーブ黒細砂
6. (第6層) 河川堆積層) 10CY6/1緑灰細砂、褐色粘質ブロック混
7. (第6層) 河川堆積層) 5G2/1緑灰細砂
8. (第6層) 河川堆積層) 10Y6/1灰細砂
9. (第6層) 河川堆積層) 2.5G6/5Lc.Lc.汚砂+砂
10. (第6層) 河川堆積層) 2.5G6/5Lc.Lc.汚砂+砂

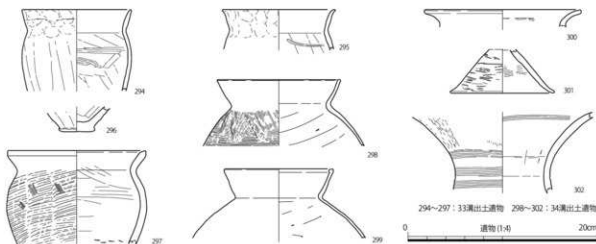


図34. 33・34溝 平面・断面・出土遺物

以上のことから第5-1層の形成時期は布留1式後半を中心とした時期とみなすことができる。

なお、弥生土器については(270～283・278～281)はいずれも弥生時代後期に偏属し、波状文や円管文(270・280)などで装飾される二重口縁壺は、後期後半～庄内期に近い時期に比定することができるため、当該期の集落が付近に存在することが推測できる。

(2) 第5-2・3層 (図32・33・34)

第5-2・3層の除去面では北西-南北方向の溝を2条(33・34溝)検出した。2条の溝のうち西側の34溝は、上面の19溝のほぼ直下に位置しており、33溝を挟んだ東側は微高地上にやや高まっている。基盤面となる河川堆積層・第6層の最上部(図6または図30:65・66)は砂礫を主体としているが、河川の埋没作用によって微高地が形成されて上部に砂礫が堆積したことで地盤が安定したと考えられ、その後に居住域が展開する要因となったことが推測できる。東側の微高地上の標高がT.P.+10.15～10.1mで、2条の溝を挟んで西側とは0.15～0.1m程度の比高があり、調査区の西側には自然流路が存在することから、西に向かってさらに地形は落ち込む。検出された微高地部分の範囲が狭いことから、顕著な遺構は確認されていないが、上面の19溝と同様に居住域を区画する溝とみなすことができる。

出土遺物については、東側微高地部分の下部の堆積にあたる第5-2層からの出土量は少ないが、土師器の高杯の脚部(282)などがあり、上層の出土遺物と大きな時期差はない。微高地西側の凹地部分下部(5-3)についても、土師器(285～290)と弥生土器(291)があり、ほかの第5層中出土の遺物と様相に大きな変わりはない。このうちほぼ完形のミニチュア土器(287～290)は、古墳時代前期には出土例が少なく、34溝の西側で4点がまとまって出土している。直上の(5-1b)からも付近で同様のミニチュア土器(268)が出土しており、いずれも調査区西側の自然流路の河岸部に位置することから、集落縁辺部にあたる河岸での祭祀行為の一端を示す資料とみられる。このほかでは(292)が北側立会い範囲で回収した遺物で、(293)については第5-3層もしくはその下部の第6層からの出土であり、小型丸底甕の祖形となるような古い時期の小型壺の可能性が推測できる。

33・34溝(図34) 微高地と落込みの境で検出された北西-南東方向の2条の溝で、西側の34溝については上面の19溝と重複した位置にある。北側断面から東側の33溝が第5-2層の直下から、西側の34溝が第5-3層の直下から掘り込まれており、同時併存するのではなく34溝が古い。規模については東側の33溝が幅2.4m、深さ0.42m、西側の34溝が幅1.9m、深さ0.31mをはかる。埋土はいずれも下部を中心に土壌化しており、炭化物等や遺物を含む。こうした堆積状況から潜水状態で徐々に埋没が進行したことがわかる。居住域が展開することが予想される東側微高地と西側にむかって落ち込むちょうど境界付近に位置しており、上面の19溝と同様に居住域の区画溝とみなすことができる。

出土遺物は33溝(294～297)・34溝(298～302)ともあまり多くはなく、いずれも土師器と弥生土器がある。このうち33溝から出土した口縁部(294・295)と底部(296)は同一個体の可能性があり、内外面を板ナデで調整する布留式とは異なる系統の甕である。またV様式系の甕(297)については、あまり磨滅はしていないため、この段階まで弥生土器の系譜をひく甕が甞る可能性がある。34溝から出土した土師器のうち、布留形甕(298)は溝の底部付近から出土したため、溝の機能時期をあらわす資料であり、外面は細かいヨコハケを基調として内面をケズリで薄く仕上げ、口縁部は内湾気味に立ち上がりて上端にやや面をもつ。もう1点の(299)も含めて、おおよそ布留1式後半頃の所産とみなすことができ、小型器台(301)も同時期のものである。このため上面の第5層中からの出土

第3章 発掘調査の成果

遺物と年代的な隔たりはあまりないことがわかる。

第5節 第6層以下の所見と遺物（古墳時代初頭～弥生時代後期）

第5層の下に堆積する層を一括して第6層とするが、調査区の西半は古墳時代前期の自然流路（5-1a）の底面まで掘削が及んでおらず、東半についても当初計画の調査終了面の高さ T.P. + 9.85m が概ね第5-3層除去面に相当しており、この高さが掘削限界であったことから、第6層の上面を部分的に掘削したに過ぎない。ただし、掘削が及んだ範囲や北側立会時の所見を総合すると、調査区東端で北

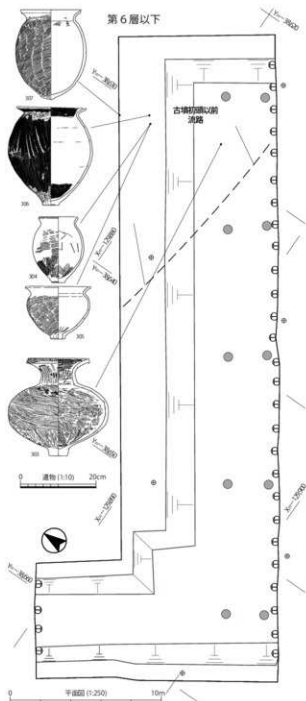


図35. 第6層以下 全体平面図

西—南東方向の洪水砂とみられる細砂の落ち込みが確認できたことから、下部には自然流路が埋没していることが把握できた（図35）。堆積状況について目視で把握できた範囲の所見を述べれば、細砂を主体とする黄色の洪水砂の間に粒径の細かい暗色帯の層が互層状にみられたことなどから（図6または図30：67～69）、流水と滞水を繰り返しながら徐々に埋没したと推測できるが、最上面には粗い砂礫層が堆積しており（図6または図30：65・66）、最終的には強い流水作用によって埋没したと判断することができる。この自然流路に伴って上面付近からは広口壺（303）やV様式系の甕（304～307）がまともに出てくるが、いずれも復元率は高いため、流路内にはまともな量の遺物が存在することが予想される。土器はほとんど磨滅していないことから、周辺には居住域が展開していた可能性が高く、周辺部からの投げ込みによるものと推測される。

出土遺物（図36）のうち、広口壺（303）は偏球形の体部をヘラミガキで仕上げ、口縁部には連続した押圧による装飾が施されている。甕（304～307）は北側の立会範囲からまともに出ており、いずれも右上がりの粗いタタキを残す。このうち（306）は外面タタキののちハケを施しており、（307）については受口状の口縁端部を呈する。これらの土器群はおおよそ森田編年V様式後半～VI様式前半頃に位置づけることができ、流路の上面から出土することから、流路の埋没時期が弥生時代後期後半頃であることを示す。

隣接する南側の市教委のH19年度調査区にお

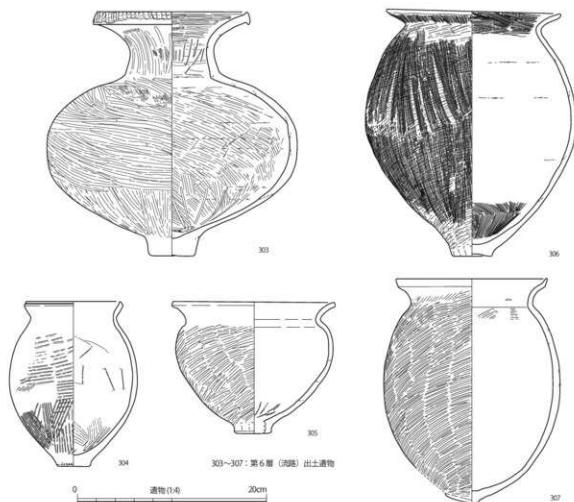


図 36. 第6層 (自然流路) 出土遺物

いても、当該期の遺構・遺物がまともで確認されており、弥生時代後期の遺構・遺物が北側まで拡がるのが判明した点は、ひとつの大きな成果である。今回の調査区はほぼ全域が河川堆積層で覆われており、かつ掘削が十分に及ばなかったことから不明な点が多々、今後は下層の状況を把握しながら遺構・遺物の拡がりを確認し、遺跡の全体像を明らかにしていくことが重要である。

【文献註】

- 1) 隣接する市教委の調査成果の所見については、調査担当者の黒須靖之氏にご教示を得た。本報告の(4-3a・b)にあたる砂礫層が、南側の市教委H19年度P区にのびているようであり、ここからは古墳時代中期の遺物がまともで出土している。今回の調査と同様に完形に成形の遺物も多く、様相は大きくは変わらない。この市教委調査区からの出土資料については、茨木市立文化財資料館のご高配を得て、資料を見させていただいた。
- 2) 日野宏 2012『大布留遺跡展 一物部氏の拠点集落を掘る一』第65回企画展記録 天理大学付属天理参考館など
- 3) 太田三喜 2006『考古学調査研究中間報告24 布留遺跡豊井(宇久保)地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査班、註2) 日野 2012
- 4) 鹿野泉 2017『井尻遺跡』(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第276集
- 5) 前坂高志 2006『大和五條の祭祀遺跡 一奈良県西内宮田遺跡一』『季刊考古学』第96号 古墳時代の祭り』雄山閣
- 6) 当センターの調査で群集土坑から出土資料に類例がある。2017年8月刊行予定『吹田操車場遺跡14』
- 7) 奥和之・酒井泰子ほか 2000『安威遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-6 大阪府教育委員会

なお、安威遺跡の出土資料については大阪府教育庁文化財保護課のご高配を得て、資料を見させていただいた。

第4章. 軟X線写真撮影による土壌構造分析

(1) 分析の目的と方法

分析目的 今回の調査では古墳時代中期の遺構・遺物が多く検出され、活発な人間活動の痕跡が認められたが、この時期には河川堆積作用によって形成された起伏のある旧地形が短期間で平坦化し、土地利用のあり方が大きく変化するのが特徴である。地形発達過程を復元しながら遺跡の性格を理解するために、該当する第4層についてはその形成過程を明らかにすることを目的として、軟X線写真撮影による土壌構造分析を実施した。分析する不攪乱柱状試料は、調査区中央の凹地部分（1地点）とその東側の微高地部分（2地点）に相当する2ヶ所で採取している（図37）。

軟X線写真による層相観察について 沖積層ボーリングコアの海成層などを中心とした層準の記載と解釈などに用いられる堆積層の一般的な観察手法で、低電圧で発生させたエネルギーの弱い（波長の長い）透過力の小さな軟X線は、わずかな密度差に応じた透過力を示すので、堆積物の微細構造を把握するのに適している¹⁾。多くの遺跡が存在する陸域では、土壌化などの擾乱作用が激しく、堆積構造を把握するのに軟X線写真が必ずしも適した方法ではない可能性があるが、その土壌構造を含め試料の観察の補助的な情報としては、肉眼と異なる波長領域の画像が有効となる場合もあると認識される。

分析方法 分析試料を厚さ1cmまで板状に成形し、湿潤状態のまま管電圧40kvp、電流2mA、照射時間120秒のX線強度条件においてX線写真撮影を実施し、富士コンピュータッドラジオグラフィ(FUJIFILM computed radiography)によるデジタル画像化を実施した。撮影・デジタル画像化は公益財団法人元興寺文化財研究所の協力を得た。なお、X線写真では礫や酸化鉄など密度の高い物質が白色(白色)を呈し、有機質に富む堆積物や植物遺体など密度の低い物質が暗色を呈する。

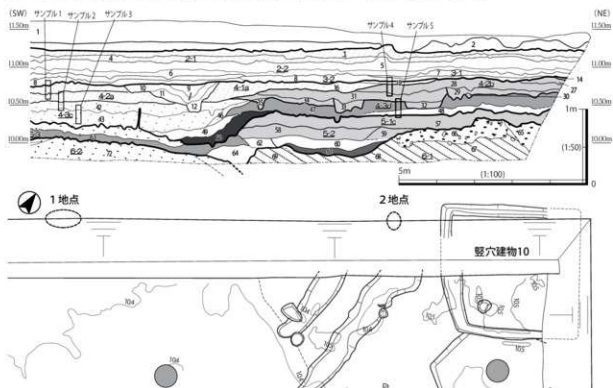


図37. 試料採取地点（北壁断面）

(2) 分析結果と観察所見

分析結果を(図 38・39)に示す。以下に遺構面ごとに下位から順に観察結果とその解釈を述べていく。

4-2 層除去面構成層と堆積環境の変遷 東側微高地(2地点)のサンプル5は、上方細粒化を示す塊状無層理の砂質シルトで構成されるのに対し、凹地内(1地点)のサンプル2の上半部とサンプルはシルトを多く含む砂で構成される。

このうち東側微高地(2地点)のサンプル5では、下端部の④に砂や礫が相対的に多く含まれ、上位の③・②が相対的に泥質となり、黒く細い直線状の根痕が多く分布する。②と③は同様の粒度組成をなすが、②は相対的に色調が暗く、堆積物の密度が相対的に減少したことを示す。さらに②には③で認められない褐色を呈する物質が多く含まれることが確認でき、これは当時の地表層の土壌層位²⁾に由来する可能性が想定される。また、炭片は②に比べ③により多く含まれる。さらに②には、相対的に密度が高く明るい色調をなす垂角塊状の集合体(図 38:BL)と思われる陰影も確認でき、偽礫(ブロック)の可能性が高い。②の上面付近で竪穴建物などが検出されていることから、③は遺構埋土などの人為的堆積物もしくはそれらが多く含まれる層準とみなすことができ、③が②に比べ相対的に堆積物の密度が低いのは、その主たる構成層に人間によって擾乱された堆積物が多く含まれているためと推定される。③に含まれる人為的擾乱堆積物としては、遺構を充填する機能時・廃絶時・放棄時の堆積物や掘削時の排土、建築部材の廃棄物などが含まれることが想定されるが、その由来については試料と軟X線写真の観察からは判断ができない。このように発掘調査の所見と同様に第4-2層除去面では人間活動が活発に展開していることが判断でき、遺構掘削などによって形成された凹地が多く存在するとともに、人為的擾乱堆積物も多く散在していたことが想定される。なお、サンプル5には礫が多く含まれるが、礫を充填する周囲の堆積物は移動・運搬営力が大きく異なる細粒の泥質堆積物であり、礫と周囲の泥質堆積物が同時に堆積することはないため、礫については人為的にもたらされたものと判断できる。

凹地部分(1地点)は層界が非常に不明瞭であり、軟X線写真には点線³⁾で示したものの、判別が非常に難しく、断面図(図 37)とは必ずしも対応しない³⁾。サンプル3とサンプル2下半部が相当する層であるが、東側微高地(2地点)に比べると粗粒な砂質堆積物からなる。このうちサンプル3の下端部の③はシルト・細礫混じりの粗粒砂～極粗粒砂で、上位の②ではシルトを多く含む極細粒砂～細粒砂から構成され、上方細粒化する。サンプル2については、下半部が層位的にサンプル3の②に対応し、粒度組成も類似するが、やや粗粒化するサンプル3の①に対応する層は確認できない。断面図(図 37)で確認される堆積状況からは、洪水時には凹地内(1地点)を中心に堆積物が累重したと捉えられ、粒度組成にもとづくと浮遊堆積物を中心した洪水堆積物の積層とみなすことができる。洪水時に冠水した際には、かなり緩やかな流況下で浮遊堆積物を中心とした碎屑物が流入および堆積しており、層位的に粒度組成の差が非常に小さく、堆積営力はかなり穏やかであったことが窺われる。細粒の泥混じり泥層や泥混じり砂層が、非常に不明瞭な平行葉理を伴いながら積層しており、粒度組成や堆積構造に差違がほとんど生じない。このため本地点の軟X線写真では層相変化が非常に乏しく、全体的にかなり均質で壁状の陰影となしている。また、潜水環境下で形成される泥層や植物遺体層もしくは腐植層が挟まれていることから、湿地や浅い湛水域が一定期間維持されるような堆積環境が形成されていなかったことを示唆しており、平常時に地表付近は水で完全に飽和されるような状態ではなかったと考えられる。未分解の植物遺体の挟在が認められないことから、平常時には凹地内の底部であっても、有機物の分解が進行するような好氣的土壌環境が維持されていたとみられる。このような土壌化の影響を受けた堆積層は、

第4章 軟X線写真撮影による土壌構造分析

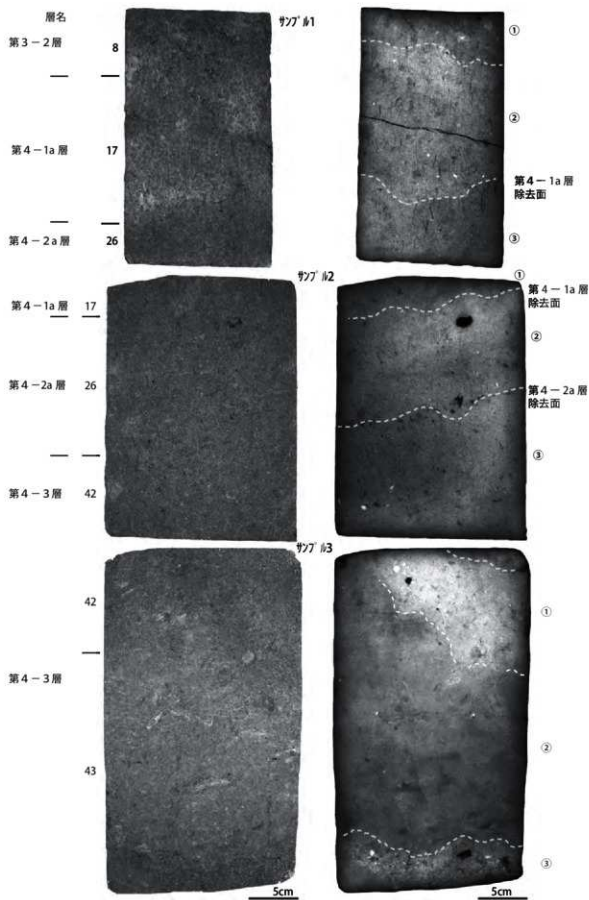


図38. 1地点(サンプル1・2・3)の試料(左:昼光写真・右:X線写真)

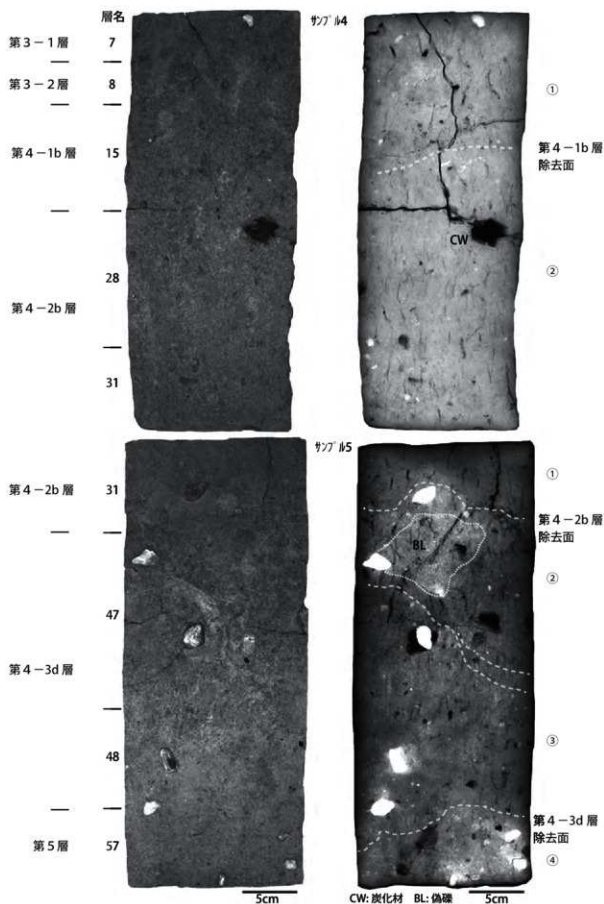


図39. 2地点（サンプル4・5）の試料（左：昼光写真・右：X線写真）

第4章 軟X線写真撮影による土壌構造分析

生物活動による擾乱によって堆積物が均質化される傾向にあり、このような場合には酸化鉄などの鉱物の沈着が顕著となるとともに、こうした土壌化作用は層内での粒度差や堆積構造を均質化させていく。以上を踏まえると、軟X線写真においてかなり均質な層相を示した要因としては、元々粒度組成の変化に乏しく堆積構造も不明瞭であったことに加え、土壌化による擾乱の影響も受けていたと考えられる。

このほかに1地点では現地層相観察から耕作土が挟み入ることも疑われたが、これまでの堆積相解析の事例を踏まえ、耕作土に關係するような層相は確認できない。試料の内視観察においても同様であり、客土や盛土と考えられるような偽礫の集合体や、遺構に伴う掘込み状の凹みも確認できないことから、流路状の凹地内では積極的な土地利用がおこなわれていなかったことが推定される。また、根痕については東側微高地（2地点）で多く分布するのに対し、凹地内（1地点）ではほとんど認められない。洪水の影響を受けることが相対的に少ない微高地では、凹地内より地表環境が安定しており、植生がより発達しやすい状態であったと推測され、さらに堆積層の被覆が薄く、地表更新が流路状の凹地内には比べ不活発であったと考えられる。このような堆積状況が植生に由来する根痕が累積的に形成されたことも要因の一つと想定される。凹地内よりも地表環境が相対的にかなり安定していたと判断でき、洪水時には冠水しなやか、冠水しても水深も極浅く、地表に泥が薄く覆われる程度であったと推測され、このような泥を母材として上方付加的に土壌生成が進行したと考えられる。これに対して、凹地内では堆積速度が相対的に大きく、洪水による砂質堆積物による被覆が間欠的に生じて、地表面の更新が繰り返されていたとみなされる。

なお、2地点のすぐ東側には下位の第6層の上に凸状の高まりがあり、この部分に砂礫が累重するが、この西側には流路状の凹地が形成されており、氾濫原堆積物を積層させつつ流路上の凹地が西側へ移動していることが読み取れる。2地点は第4-2層除去面下位の凹地の肩部に位置しており、第6層段階から調査区内では比較的高い位置にあたることから、付近は古墳時代前期後半～中期初頭には既に地表環境が安定的となっており、このような状況が中期前半～中頃にかけて継続していたと考えられる。サンプル5下半部の④・③では、相対的に堆積層の密度が高く、全体的な擾乱を示唆するような不均質な密度差が認められないため、地表環境の安定さを示すと考えられる。そして、②以外では明確な人為的堆積物と考えられるような層相が認められないことから、下半部④・③では遺構形成などの地表での掘削などを伴う人間活動が相対的に不活発であったと推定される。ただし、④・③には人間活動に由来する礫や炭化物片なども含まれることから、近傍においては人間活動が存在したことが強く示唆され、このような特徴は凹地内では認められないため、東側微高地において人間活動の痕跡が継続していたことが窺える。そして微高地と凹地底部との比高がかなり小さいことから、人間活動が認められる時期には流路内の凹地の堆積が穏やかな状態にあり、相対的な水位が低下傾向の段階にあったと推測される。

第4-1層除去面と被覆層 東側微高地（2地点）のサンプル4が砂質シルトで構成され、凹地部分（1地点）のサンプル2上半部②とサンプル1の下端部③はシルト混じり細粒砂～中粒砂で構成される。第4-1面では第4-2面と同様の堆積状況が存在したと考えられ、2地点1地点の粒度差は下位に比べて小さく、粒度組成も細粒化する。これは氾濫原の堆積が進行して、地形の平坦化が顕著になりつつあったことを示している。そして第4-1層除去面は、1地点・2地点ともに塊状無層理をなすとともに、層界も不明瞭なものが多い。この要因としては、層相観察結果から堆積営力がかなり穏やかであったことと、土壌化の影響が支配的であったと推定され、洪水時の間欠的な堆積物供給と平常時の土壌化によって氾濫原の堆積が穏やかに進行したとみられる。根痕については、第4-2層除去面と同様に2

地点の方が多く分布しており、層中に粗大な炭化物片（図5：CW）の挟みも認められる。このことは第4-2層除去面埋没後も人間活動が存在していたことを示しているが、サンプル4はサンプル5に比べ礫がほとんど含まれない。このような特徴がどのような人間活動に関連するのかについては、発掘調査結果をふまえた検討が必要である。また、1地点では、第4-2層除去面と同様に、明確な人間活動に関係するような層準を確認することができない。

さらに上位の第4-1層除去面被覆層は、凹地内（1地点）のサンプル1の上半部に対応しており、より泥質な砂質シルト～シルト質砂で構成される。全体的な特徴は同じ地点の下部とほぼ同様であるため、土壌化が進行しながら緩やかに埋没が進んだ氾濫原堆積物と解釈される。また、人間活動についても、第4-2層除去面と同様に明確な層準の挟みは確認できない。当該期の人間活動については、発掘結果や他の分析結果を併せて、今後より詳細に検討していく必要がある。

（3） まとめ

調査区における堆積環境の変遷と人間活動 今回の分析では、古墳時代中期の第4面構成層について堆積物試料とその軟X線写真による堆積相解析をおこない、当該期の堆積環境復元と人間活動痕跡についての検討を加えた。観察をおこなった地点では、第4層の下位に古墳時代前期の第5層と古墳時代初頭以前の第6層が存在しており、第6層と第5層では上に凸型をなして堆積層が累重する。このうち第6層では、凸型をなす高まり部分が斜交葉理と層理をなす砂層ないし砂礫層で構成され、第5層は第6層の上面を被覆するようにして累重する泥混じり砂層である。第4層は凸型の高まり部分の間に形成された凹地を活発に埋積する砂質泥～泥質砂中心の堆積層からなる。

堆積層の特徴および（増田1999）などの堆積学的解説にもとづくと、第6層については洪水によって形成された砂礫からなる氾濫堆積物のロープ、もしくは網状河川のような堆積システムで形成された河床堆積物と解釈される。凸型の高まり部分については、流路中やその岸に形成された、低水時には通常水面上に現れている砂礫堆（バー）を構成すると考えられる。第6層段階に調査区ないし極近傍に存在した流路は、網状河川でみられるような河床が浅く、さらに流路変更もしばしば生じるような状態であったことが推測される。第5層から第4層にかけても、同様の河川堆積システムが維持されていたことが想定される。ただし、流路が調査区外に移動して、第5層から第4層の古墳時代前期から中期には流路近傍の氾濫原となっていたと考えられる。この時期には流路から洪水堆積物が供給され、氾濫原の埋積が進行したことが堆積層の累重状況から把握される。

調査区が氾濫原となった第5層・第4層には、今回の分析対象である第4層での観察結果と断面写真での層相から、土壌相としての特徴が相対的に強いと思われる層準が挟み込めることが確認できるが、下位の第6層を含め第5層・第4層では、明瞭な暗色帯をなす土壌化層準が認められない。また、上述のように土壌化の影響が示唆されるものの、第4層においては土壌構造の発達がほとんど観察できない。このような状況は洪水とそれに伴う堆積物の被覆などにより地表更新される営力と頻度がともに高く、表層において土壌発達が進行するまでの状態に至らなかったことを示唆しているとみられる。

上記のような堆積-土壌環境が形成された古墳時代中期には、竪穴住居などの遺構が東側微高地に挟み込んでおり、古墳時代中期以前に形成された氾濫堆積物や河床堆積物に起因する高まり上を中心にして展開している。また、居住域としての利用は砂礫の高まり間の凹地の埋積があまり進行しない段階に展開した可能性が示唆される。このような微地形と遺構のあり方からは、やや不安定な氾濫原の堆積環境

第4章 軟X線写真撮影による土壌構造分析

下において、調査区付近に展開する規模の小さな微地形を利用して人間活動領域としていたことが窺える。そして古墳時代中期後半になると調査区で確認される氾濫原の微地形は、全体的に埋没が進んで平坦化しており、発掘調査においてもこれを追認する所見が得られている。

総持寺遺跡の立地環境とその特質 総持寺遺跡の今回の調査区は、最終氷期に形成および離水した低位段丘面である富田台地の段丘崖下に近接する安威川と茨木川の合流点付近の東側の沖積氾濫原上に位置するが、安威川流域で古墳時代中期に展開する郡・倍賀遺跡や安威遺跡とは立地環境が異なっている。前者は周辺遺跡の調査・分析成果から扇状地性の地形面上に立地することが、後者は沖積氾濫原上ではあるが離水傾向にある環境下にあったことが調査・分析から推測でき、地形的にはより安定している。これに対して当遺跡では古墳時代やその前段階の弥生時代には微高地が未発達な段階にあり、洪水も間欠的に発生していたことが窺えるが、その一方で古墳時代中期には前段階に比べると相対的に河川堆積作用が静穏化しており、地形的にやや高い微高地を利用して居住域を展開させていたことが特色である。

調査区付近では古墳時代前期には既に流路と洪水堆積物による氾濫原面の上方付加的な発達が目撃されることから、古墳時代に本遺跡付近を流下する古安威川やその分流路では河床が浅く、さらに頻繁に分流や河道変更をするような状態であったことが推測される。このような状況の河川は不安定であり、水路や耕作地の維持・管理をおこなうことが難しい側面があるが、その一方で河床が浅く分流傾向にあることから、灌漑水路を流路と接続させてそこから分水することが比較的容易であった可能性も推測される。このため調査地付近は、古安威川からの分水地点として重要な場所であったことが推測されるとともに、その分水範囲としては本遺跡の西側に古安威川および古茨木川が流下していたことが確実であるため、当遺跡の東側もしくは南側の氾濫原であったことが予想される。今後は周辺での発掘調査成果をもとに、その領域での地形発達史や遺跡形成過程を検討していくことが課題である。

【文献誌】

- 1) 斉藤文紀 1993「軟X線写真顕微鏡法」『第四紀史料分析法2 研究対象別分析方法』日本第四紀学会編、東京大学出版会
- 2) 無機質土壌の表層で、多少とも有機物を含み、暗色で生物の活性が高く、湿潤気候下では物質の溶解による損失が起こる層位である。
久馬一樹編 1997『最新土壌学』朝倉書店
- 3) 軟X線写真では堆積物の層理や埋理を伴う層界は明確な陰影として確認できる場合が多いが、層位の変化が漸移的に目立った物性の変化を伴わなければ層界の識別が困難である場合が多い。特に考古学的には古土壌を鑑別として区分することが一般的だが、この古土壌は直下の物性が大きく異なる場合が多く、軟X線写真では考古学的に判断できる層界を直接的に反映することはむしろ稀である。一方で、土壌化に関係する構造においても根痕や根管などの生物擾乱に起因する粗孔層や粒間発達などに伴う間隙は、明確に軟X線で確認できる。
- 4) 寝屋川市讃良部条里遺跡（弥生時代中期）や豊中市鵜部遺跡（弥生時代後期）など事例では、作土相当層において砂礫粒を反映した白色粒が泥の基質内に単粒で散在するように堆積していることや、数mm～数cm程度の集合体の発達を示唆するような、まだら状の密度差を示す陰影が目立つといった特徴が読みとれる。
パリオ・サーヴェイ株式会社 2009「古環境分析」『讃良部条里X線跡一本文編一』（財）大塚文化財センター調査報告書第188集、パリオ・サーヴェイ株式会社 2003「自然科学分析」『鵜部遺跡』（財）大塚文化財センター調査報告書第100集
- 5) 増田富士雄 1969「透水層・滲水層のトレース」ダイナミック地質学からのアプローチ『地下水技術』
- 6) 牧野泰彦 1998『砂礫堆積』『堆積学辞典』朝倉書店
- 7) 宮地良典・楠利夫・武蔵野實・田村王良昭・井本伸広 2005「京都市西部地域の地質」地質地質研究報告5万分の1地質図編 京都（11）第39号
- 8) パリオ・サーヴェイ株式会社 2015「中条小学校遺跡の自然科学分析」『中条小学校遺跡（分析・考察編）』茨木市教育委員会
- 9) 岡田賢輔 2016『安威川跡田』大塚教育委員会

第5章. 総括

調査地周辺の土地利用と地形環境の変遷 今回の発掘調査では、中世～古代までの耕作溝群や、古墳時代中期の集落跡、弥生時代後期～古墳時代前期の自然流路などを確認した。まず調査成果の基礎的な整理として、調査地周辺における土地利用の変遷をまとめると（図40）、第5層・第6層にあたる古墳時代前期以前は北西—南北方向の流路が調査区内に存在しており、周辺一帯が氾濫原であったことがわかる。下層で確認された流路の埋没作用によって形成された微高地を利用して、古墳時代前期以降は居住域が展開しているが、大局的にみれば流路は東から西へ移動しており、周辺一帯の水位も低下傾向にあったこと示す。このことに加えて富田台地の段丘構成層の再堆積層（4-3 b）が微高地を形成しており、前期後半頃にはより地形が安定化していたことが窺える。これに相当する第4-3層除去面では、明確な居住関連遺構は未確認であるが、19溝や1期調査1区・2区O1流路第4層・第6層などから前期末～中期初頭頃（辻編年2段階頃）の土師器などがまとまって出土しており、下層の第5層以下と比べると格段に出土量が増えることから、この時期に集落は拡大傾向にあったとみてまちがいはない。

第4-2層除去面に相当する中期前半以降は、この流れを引き継ぎつつ集落が拡大しており、地形も徐々に平坦化する傾向がみられる。現地での層序の観察と土壌分析の成果を総合すると、凹地部分はシルトや細かな砂を主体とする氾濫堆積物を主体としているが、堆積状況からは全体的には離水傾向にあると判断でき、古墳時代中期を通して調査地周辺の微地形が平坦化されていく。居住域の動向としては、今回も含めた周辺一帯の調査で確認された竪穴建物跡がこの時期にほぼ限られ、遺物の出土量も最も多い。竪穴建物はいずれも一辺3～4m前後の簡易な構造の建物で、狭い範囲に建物が重複しながら密集しており、埋土が不明瞭なものが多いのも特徴で、遺物からはTK208型式頃を中心とし、大きな時期差を見出しがたい。このことは短期間のうちに頻繁に建て替えがおこなわれていたことを示しており、全体的な遺物の出土量などもふまえれば、集落のピークはTK216～23型式頃にあるといえる。さら

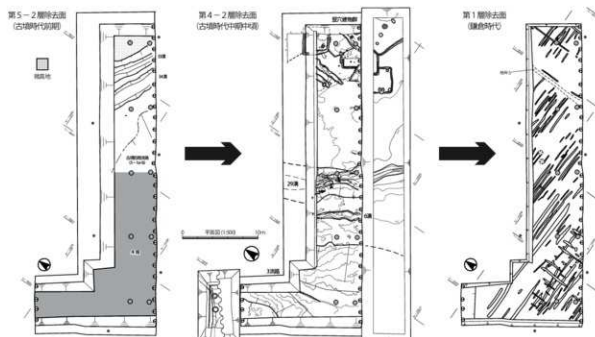


図40. 調査区における土地利用の変遷

第5章 総括

に、居住域から20m西の微高地上では、4土器溜まりをはじめとして遺物がまとまって投棄されているが、これについては集落縁辺部における祭祀行為の一端を示すものとして注目される。やや時期が下る第4-1層除去面については、TK23型式頃におおよそ併行する中期後半頃とみなせるが、遺物はまとまって出土するもののこの段階での居住域の拡がりは今のところ未確認であり、中期末以降の遺物はほとんど出土しなくなる。地形は平坦化し、上層には古代から近世までの耕作土層が累重することから、JR東海道本線が敷設される明治のはじめまで、長らく耕作地として土地利用がなされたと判断できる。

なお、古代以降の耕作土層のうち上面の第1層・第2-1層は、下層に比べるとやや粒径が粗く、調査地周辺では第2-1層の形成以降は水位が上昇傾向にあったことを示している。安威川は度重なる洪水が起こった結果、近世初頭には西側に付け替えられて現在に至っており、こうした河川上昇のはじまりが鎌倉時代頃に遡る可能性を示唆するものといえるだろう。

このように当遺跡は安威川の氾濫原に位置しており、地形の変遷過程と遺構・遺物の動態に関する具体像が明らかになりつつあるが、先行しておこなった1期調査や南北の隣接地における市教委の一連の調査などでも、同様の遺構・遺物が確認されており、今回の調査成果はこうした既往の調査成果を追認するものでもある。これに加えて活発な河川堆積作用による地形変化の過程を捉えることができた点新しい成果であり、土地利用の変遷と人間活動の相互作用についてさらに検討を深めていくことが重要である。その一方で、第6層の上面で掘削限界に達したため古墳時代初頭以前の状況については不明な点が多々多く、上層と同様のより古い時期の自然流路の存在を確認したが、市教委による南側の隣接地の調査ではこの時期の遺構・遺物がまとまって確認されており、当該期の遺跡の全体像の復元が今後の課題のひとつといえる。さらに南側の調査区や総持寺に南面する調査区(H7・18年度調査区)などでは、弥生時代前期～中期や縄文時代晩期の遺構・遺物も少なからず確認されており、通時的に土地利用と人間活動の動向を把握していくことも必要である。

古墳時代中期の集落の特徴と集落構造 ここまで述べたように、竪穴建物などの居住関連遺構が確認でき、かつ出土遺物が最も多いのが古墳時代中期であり、この前後で土地利用のあり方が大きく変化していることから、その評価が重要になる。さらに調査地点から北東500m地点には、40基余りから成る総持寺古墳群が展開しており、時期的にも両者の関係性が注目される。

総持寺遺跡の集落の特徴を整理すると、これまでのところ中期中頃以前の竪穴住居を確認でき、TK216型式ごろには一定量の須恵器の流入が認められることから、渡来系生活様式を比較的早く受容した集落とみなすことができる。これに加えて、今回の調査では籾羽口などの鍛冶関連遺物や製塩土器をはじめて出土したことは重要な成果のひとつといえ、渡来系の要素が強い地域開発の拠点としての性格を強めつつある。このような成果は、まとまった量の初期須恵器を供給する総持寺古墳群とも整合する性格を有している。今後は古墳群の動向などでも類似する長原遺跡の様相などと比較していくことが重要であり、手工業生産に関わる遺構・遺物や土木関連遺構の検出などが期待される場所である。

また、具体的な集落の構造については、今回の調査地点は隣接する市教委の調査成果から集落域の南限近くにあり、古墳群より近い北側に中心があることが推測できる。調査地点付近の詳細な土地利用のあり方については、居住域が北東方向に拡がるのが確実で、調査区内でみられたような凹地や放棄流路などの低地部が所々にあり、相対的に低い後背地に挟まれた微高地上で遺構・遺物がまとまって検出されている(図41)。なお、1期調査で検出されたO1流路は、最終的な埋没時期が古代まで下ることから存続期間が長く、基幹水路としての役割を果たしていた可能性も想定できるが、さらに隣接する

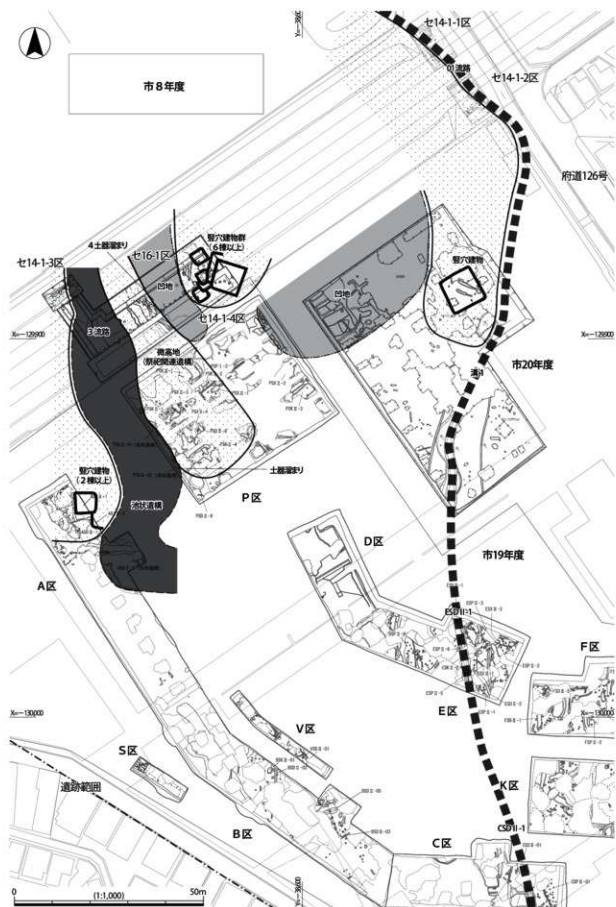


図 41. 古墳時代中期における総持寺遺跡の集落構造

第5章 総括

南側の市教委の調査では、これに派生することが予想される流路や溝などが確認されており、今後周辺で調査がおこなわれる場合には、集落景観の復元を念頭において調査を進めていく必要がある。

安威川流域における総持寺遺跡の占める位置 古墳時代前期には紫金山古墳や將軍山古墳などの前方後円墳が周辺にも存在するが、大王墓に準ずる規格と規模を備えた太田茶臼山古墳の出現は、この地域の歴史的な展開の中でも特に重大な出来事であり、畿内の社会構造を考える上でも重要な存在とみなされる。さらに太田茶臼山古墳と前後して、北側の土室周辺には古墳時代中期を通して一連の首長系諸が継続し、台地上では総持寺古墳群や太田古墳群などの初期群集も展開するが、このうち総持寺古墳群では太田茶臼山古墳の埴輪を焼成した新池窯から最も早く埴輪の供給を受けていたことが判明しており、太田茶臼山古墳の出現を考える上でも重要な位置を占める。このため、総持寺遺跡における古墳時代の集落の展開は、単なる自然発生的な性格によるものとは言い難い側面を持ち合わせており、総持寺遺跡の集落の様相はこの地域の社会動向を復元する上で新しい知見をもたらすものといえる。

安威川流域とその周辺では、安威遺跡や太田遺跡、郡遺跡、倍賀遺跡などの集落遺跡が、この時期に新たに出現することから、やはりひとつの画期とみなすことに大きな異論はない³⁾。この中でも対岸の安威遺跡には、畿内でも特に古い時期の造り付け竈が存在し、韓系土器や最古相の須恵器、製塩土器や鍛冶関連遺物などの出土遺物の内容から渡来系集団との関連性が特に深く⁴⁾、一方で竪穴建物の構造や出土遺物の様相などからは、総持寺遺跡との関係性も推測できるだろう⁵⁾。安威遺跡の方が、やや先行する時期にピークがあるが、考古学的な検討から遺跡どうしとの関係性を検討することがまずは重要であり、その上で広域的な集落動態の中でそれぞれの遺跡の位置づけを明確にしておく作業が必要になる。

このように安威川流域一帯では古墳時代中期に古墳や集落の展開にダイナミックな動きがあり、今回の調査成果は流域一帯や三島の古墳時代社会の動態を考える上で新しい知見をもたらすものといえる。また、昨今は環境の変化が社会に与える影響を重視する傾向にあることから、調査地周辺の地形の変遷過程と遺跡の動態や人間活動との関係性について見通しを得ることができた点も重要であり、こうした事例はまだ少ないため良好なモデルケースのひとつになりうる。今回の調査成果を歴史的脈絡の中に位置づけ、三島の地域史復元や古墳時代の社会変化の解明に有効に活用されていくことが望まれる。

【文献】

- 1) 総持寺遺跡における居住の調査成果については、第2章と関連する表1および図5にまとめてあり、そちらを参照されたい。
- 2) 中野咲・中久保辰夫 2013『韓半島系土器のあり方からみた集落分類』『古代学研究』第199号 古代学研究会
- 3) 中久保辰夫 2012『渡来人がもたらした新技術』『古墳時代の考古学7 内外の交流と時代の潮流』同成社
- 4) 大庭重信 2016『地形発達と耕地利用からみた弥生・古墳時代の地域社会』『考古学研究』第63号2巻 考古学研究会
- 5) 府道126号総持寺停車場線は条里地割とは異なる方向にのび、古い流路の痕跡を示す可能性がある。これに沿う水路は富田方面までを潤す役割を果たしており、こうした水利の原型がいつの時期まで遡るかは定かでないが、1期調査1区・2区O1流路を踏襲するものである可能性も想定できなくはない。今後は水田開発に関わる溝・流路の位置関係と帰属時期を正確に把握し、水利システムや耕地開発に関する知見を蓄積させることが重要といえる。
- 6) 奥和之・小沼成ほか 2005『総持寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2004 - 2 大阪府教育委員会
- 7) 岡田賢 2016『摂津地域』『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 8) 奥和之・酒井泰子ほか 2000『安威遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 1999 - 6 大阪府教育委員会
- 9) 詳細な検討が必要であるが、遺構については一辺3~4m程度の小型の竪穴建物を主体し、主柱は明確でないものが多い。遺物に関しては、一例として土師器高杯の底部にケズリを施すいわゆる1群系有稜高杯(三好2010)がこの時期まで残り、製作技法や器質などの共通性が高い資料がふたつの遺跡で見られることが指摘できる。

三好玄 2010『布部式土器様式構造の再検討—複製器種を中心に—』『布部山考古学論叢Ⅱ』大阪大学考古学研究室

出土遺物（土器類）一覧表

遺物 番号	調査 年度	地区 名	遺構名	位置 (方位)	種別	器形	時期	出土 層位 (G1)	出土 層位 (G2)	数量 (枚)	保存 率	焼成	胎土	色調	調査・備考
1	7	746	第1層	須原遺	鉢	鎌倉				0.3	0.3	口縁 1/2以下	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	無施
2	7	746	第1層	須原遺	甕	鎌倉	12.2			0.4	0.4	口縁1/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	
3	7	746	第2層 除去土	瓦葺	小皿	鎌倉	9.0			1.5	0.3	口縁2/3	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	無施
4	7	746 746	第2層	瓦葺	甕	鎌倉			4.8	1.3	底面3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	取り付片断	
5	7	746	第2層	瓦葺	甕	鎌倉			3.4	1.3	底面3/2	不灰	内: N9 外: N9 底: N9		
6	7	746 746	第2層	白磁	甕	鎌倉	15.2			2.2	0.3	口縁2/3	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	無施
7	7	746 746	第2層	白磁	甕部	鎌倉			7.0	0.4	底面3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	無施	
8	8	746	第2層	赤土器 (A類)	甕	平安 後期	14.0			14.7	0.7	口縁1/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	内面へうろつき
9	8	746 746	第2層	土師器	皿	平安 後期	12.2			11.9	0.3	口縁1/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	
10	8	746 746	第2層	土師器	小皿	ての字 平安 後期	9.2			1.0	0.2	口縁2/3	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	
11	8	746 746	第2層	赤土器 (B類)	口縁	平安 後期				0.2	0.2	口縁1/2 以下	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	
12	8	746	第2層	土師器	甕部	平安 後期			5.0	0.8	底面3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	取り付片断	
13	8	746 746	第2層	瓦葺	鉢	口縁	平安 後期			0.9	0.9	口縁1/2 以下	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	
14	8	746 746	第2層	須原遺	甕部	平安 後期			5.8	0.8	底面3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	内面割(うろつき)	
15	8	746	第2層	須原遺	甕部	平安 後期			7.6	0.8	底面3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9		
16	8	746	第2層	須原遺	甕部	平安 前期			0.9	0.9	口縁1/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	へうろつきあり。裏2層割付 6-13割付。7-5割付あり	
17	8	746	第2層	白磁	甕	口縁	平安 後期			0.4	0.4	口縁1/2 以下	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	無施
18	8	746	第2層	埴輪	杖	古墳 古			0.4	0.4	口縁1/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	口縁。外周折片あり	
20	9	746	第3層	須原遺	杯S	鎌倉			6.0	0.2	口縁1/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	8層位後半-9層位前半	
21	9	746	(西側溝)	第3層	灰土 残土	鎌倉			6.4	1.8	底面3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9		
22	9	746	第3層	須原遺	皿 or 変型	口縁	古墳 中期	10.6			3.4	無紋	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	内面割付
23	9	746	第3層	須原遺	(体部)	古墳 中期				5.3	1/2 以下	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	内面割付	
24	9	746 746	第3層	土製品	土鐘	古墳 古	2.1			0.4	0.4	口縁1/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	
25	9	(北側溝)	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	13.2	15.3	4.1	0.3	口縁2/3	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4	
26	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	11.8		4.0	5/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4	
27	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	12.0		4.3	7/2	やや 不灰	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-2
28	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	12.2	11.6	4.2	0.3	口縁4/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-2
29	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	12.4		4.1	6/2	やや 不灰	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-2
30	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	12.3		4.6	10/2	やや 不灰	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-2
31	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	13.2		14.7	0.3	口縁2/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
32	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	12.6		3.7	0.3	口縁4/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
33	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	13.4		4.2	0.3	口縁4/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
34	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	13.4		5.5	4/2	やや 不灰	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
35	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	11.3	13.9	4.8	0.3	口縁4/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
36	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	10.0		5.0	5/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-2	
37	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	10.1		4.2	0.3	口縁3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
38	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	10.5		4.3	0.3	口縁2/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
39	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	10.4		14.5	0.3	口縁2/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
40	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	杯身	古墳 中期	11.3	13.6	14.9	0.3	口縁3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
41	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	高杯 身	古墳 中期	14.0		14.0	0.3	口縁4/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
42	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	高杯 身	古墳 中期	13.0		5.2	11/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4	
43	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	高杯 身	古墳 中期	12.5	12.6	5.0	0.3	口縁6/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4
44	11	746	1土坑	第3層 除去土	須原遺	高杯 身	古墳 中期	11.0		18.2	10/2	口縁3/2	灰 硬質無紋(内 底・裏面)	内: N9 外: N9 底: N9	外周割(ウラズリ) N9-4

出土遺物（土器類）一覧表

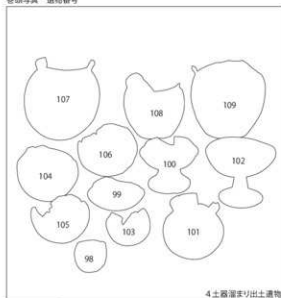
遺跡名	調査年度	遺構	位置	遺構名	層位(面)	種別	発掘	時期	出土時期	数量	形状	材質	色調	調査・備考			
227	28	7-3		第4-3層(4-5)	土師器	甕	布留型	古墳前期	176	12.9	ⅠB	ⅠB	灰	内面ヘラズリ			
228	28	7-3		第4-3層(4-5)	弥生土器	甕	V形式	144	13.5	0.5	ⅠB	ⅠB	灰	内面タタキ			
229	28	7-3	(北側)	土師器	罐	高杯	有段	古墳前期	65	6.0	7.3	ⅠB	ⅠB	内面ヘラズリ			
230	28	7-3	(南側)	土師器	高杯	有段	布留型	古墳前期	65	6.1	1.2	ⅠB	ⅠB	内面ヘラズリ			
231	28	7-4	(南側)	土師器	甕	布留型	古墳前期	131	12.6	0.8	ⅠB	ⅠB	内面ヘラズリ				
232	28	7-4	(南側)	土師器	甕	布留型	古墳前期	138	13.8	0.8	ⅠB	ⅠB	内面ヘラズリ				
233	28	7-5		土師器	甕	有段	古墳前期	158	13.9	0.8	ⅠB	ⅠB	内面ヘラズリ				
234	28	7-5	(南側)	土師器	大形鉢	古墳前期	272	68.2	0.8	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面ヘラズリ			
235	28	7-6	3.道路(下層)	弥生土器	甕	有段	古墳前期	14	14.4	0.6	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ		
237	28	7-6	3.道路(下層)	弥生土器	甕	有段	古墳前期	14	14.0	0.6	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ		
238	29	7-3		第4-3層(除去面)	須恵器	鉢	有段	古墳中期	128	12.9	4.8	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ	
239	29	7-3		第4-3層(除去面)	須恵器	小形鉢	有段	古墳中期	111	13.6	4.9	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ	
240	29	7-3		第4-3層(除去面)	須恵器	土師	有段	古墳中期	4.6	2.4	1.2	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ	
241	29	7-3		第4-3層(除去面)	須恵器	土師	有段	古墳中期	2.6	2.6	1.2	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ	
242	29	7-3		第4-3層(除去面)	須恵器	土師	有段	古墳中期	2.3	1.2	1.2	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ	
244	31	7-3		第4-3層(除去面)	須恵器	鉢	有段	古墳中期	7.3	5.4	0.8	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ	
246	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	143	14.5	10.0	127	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
247	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	136	13.9	6.6	103	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
248	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	146	14.8	6.8	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
249	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	108	10.5	7.7	121	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
249	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	98	9.7	6.3	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
250	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	96	6.0	1.2	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
251	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	176	6.7	7.7	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
252	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	112	6.8	0.8	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
253	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	鉢	有段	古墳中期	131	6.5	6.9	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
254	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	鉢	有段	古墳中期	106	10.9	6.7	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
255	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	鉢	有段	古墳中期	9.7	13.7	14.5	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
256	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	鉢	有段	古墳中期	104	13.8	11.6	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
257	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	甕	布留型	古墳中期	152	21.1	6.8	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
258	31	7-3	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	甕	布留型	古墳中期	155	22.6	16.3	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
259	31	7-4	19溝	第4-3層(除去面)	土師器	高杯	有段	古墳中期	20.7	14.4	16.2	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
260	31	7-4	19溝(南側)	第4-5層(第5層)	土師器	高杯	有段	古墳中期	145	14.7	5.3	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
261	31	7-4	19溝(南側)	第4-5層(第5層)	土師器	高杯	有段	古墳中期	152	1.6	6.5	102	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
262	33	7-4	(北側)	第5-1層(5-1)	土師器	高杯	有段	古墳中期	6.7	1.2	1.2	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ	
262	33	7-4		第5-1層(5-1)	土師器	高杯	有段	古墳前期	104	6.6	6.6	512	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
264	33	7-4		第5-1層(5-1)	土師器	甕	有段	古墳前期	10.8	6.3	0.8	412	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
265	33	7-4		第5-1層(5-1)	土師器	甕	有段	古墳前期	12.2	6.2	0.8	412	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
266	33	7-4		第5-1層(5-1)	土師器	甕	有段	古墳前期	14.0	6.0	0.8	412	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
267	33	7-4		第5-1層(5-1)	土師器	甕	有段	古墳前期	16.0	6.7	0.8	412	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ
268	33	68	7-4	第5-1層(5-1)	土師器	鉢	有段	古墳前期	4.1	2.6	3.1	212	ⅠB	ⅠB	ⅠB	ⅠB	内面タタキ

写真図版



ミニチュア土器出土状況 (287～290)

全部写真 遺物番号



4 土器深まり出土遺物



第 5 層出土ミニニョア土器



1. 調査地遠景 (線路中央部分が調査区) [北から]



2. 北壁断面 (東側) [下半が第4層以下]



3. 北壁断面 (中央) [下半が第4層以下]

写真図版2

基本層序・断面2 / 第4-1層除去面



1. 北壁断面 (西側) [砂礫層が4-3 b、砂層が5-1a]



2. 4土器溜まり検出状況 [北から]



1. 第1層除去面検出状況 [北東から]



2. 第1層除去面検出状況 [西から]



3. 第2-1層除去面検出状況 [北東から]



4. 第2-1層除去面検出状況 [西から]



5. 第2-2層除去面検出状況 [北東から]



6. 第2-2層除去面検出状況 [西から]



7. 第3-2層除去面検出状況 [北東から]



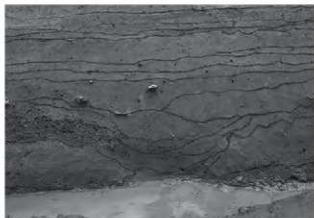
8. 第3-2層除去面検出状況 [西から]



1. 29 溝検出状況 [南から]



2. 1 土坑断面 [南東から]



3. 29 溝断面 [南東から]



4. 3 流路遺物出土状況 [北西から]



5. 3 流路断面 [南から]



1. 第4-2層除去面検出状況【北東から】



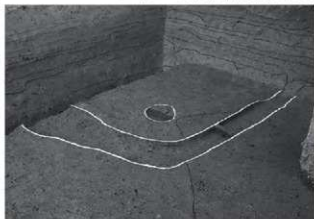
2. 第4-2層除去面竪穴建物群検出状況【西から】



3. 第4-2層除去面検出状況【西から】



4. 竪穴建物10【西半：西から】



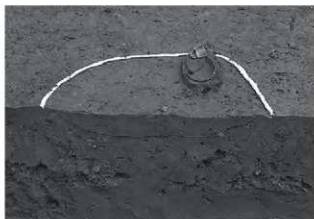
5. 竪穴建物10【東半：南から】



1. 19溝検出状況【南東から】



2. 第5-1層除去面検出状況【北西から】



3. 20土坑検出状況・断面【北西から】



4. 第5-2層除去面検出状況(33・34溝)【北西から】



5. 34溝布留形裏(298)出土状況【南西から】



27



30



35



36



42



46



52



51



56~62ほか



74

写真図版 7

出土遺物 1

1 土坑 / 第 4 - 1 層

1 土坑 (27・30・35・36・42・46・51・52ほか) / 第 4 - 1 層 (74)



4 土器溜まり (98 ~ 102・107 ~ 109 緑か滑石製白玉) / 第4-1層 (実 55・30)



168

169



175



171



183



172



184



68



72



71

写真図版 9

出土遺物 3

3 流路 / 第 4 - 1 層

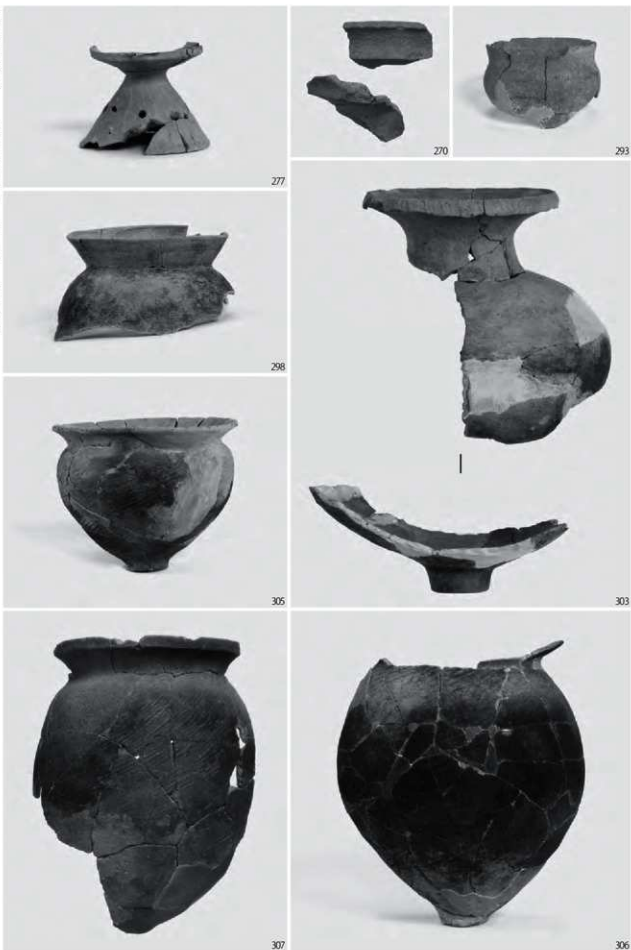
3 流路 (168・169・171・172・175・183・184) / 第 4 - 1 層 (68・71・72)





写真図版 11
出土遺物 5
19溝 / 鍛冶関連遺物ほか

19溝 (244・245・252・255～259) / 紡錘車 (84)・鍛冶関連遺物 (85・86・97・229)



第5層出土遺物 (27・280・293)・34 溝 (298) / 第6層出土遺物 (実 303・305～307)

報告書抄録

ふりがな	そうじいせき4						
書名	総持寺遺跡4						
副書名	摂津富田・茨木間新駅設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第280集						
編著者名	笹栗 拓						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号 TEL. 072-299-8791						
発行年月日	平成29年6月30日						
所収遺跡名	所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
総持寺遺跡	大阪府茨木市 庄一丁目 ・西河原一丁目	27211	32	北緯 34° 82' 83" 東経 135° 57' 83"	2016.11.01 ~ 2017.01.18	216	新駅設置工事に伴う 記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
総持寺遺跡	生産域	中世～古代	耕作層・耕作溝	土師器・須恵器・瓦器 黒色土器・白磁			
	集落	古墳時代中期	竪穴建物・溝・土坑 土器溜まり(祭壇遺構) 自然流路	土師器・須恵器・製塩土器 鍛冶関連遺物・土製紡錘車 滑石製玉類	竪穴建物3棟以上 (通形付け端を伴う建物1棟) 完形の遺物多数あり 製塩土器と鍛冶関連遺物		
		古墳時代前期	柱穴・溝・自然流路	土師器			
		古墳時代初頭 ～弥生時代後期	自然流路	弥生土器			
要約	<p>中世～古代までの耕作地、古墳時代中期の集落跡、古墳時代前期と古墳時代初頭～弥生時代後期期のふたつの時期の自然流路などを検出した。特に古墳時代中期の集落については、限られた調査面積にも関わらず、竪穴建物が多まって確認されたほか、集落縁辺部での祭祀遺構もみつかっている。竪穴建物には造り付け端の端部を伴うものがあり、出土遺物には初期須恵器や製塩土器、鍛冶関連遺物なども含まれることから、渡来系要素の強い集落とみなすことができる点が重要で、台地上に位置する総持寺古墳群との関係も注目される。</p> <p>さらに下層では、古墳時代前期以前の自然流路を確認しており、安威川の氾濫原における地形発達過程と遺跡形成に関する知見を得ることができた。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第280集

総持寺遺跡 4

摂津富田・茨木間新駅設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

発行年月日 / 2017年6月30日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / アインズ株式会社 大阪営業所
大阪府大阪市中央区久太郎町2-5-31

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第280集

総
持
寺
遺
跡
4

茨木市

総持寺遺跡 4

摂津富田・茨木間新駅設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

二〇一七年六月

公益財団法人
大阪府文化財センター

2017年6月

公益財団法人 大阪府文化財センター



1. 竪穴建物7〔南西から〕



2. 29溝 高杯出土状況〔西から〕